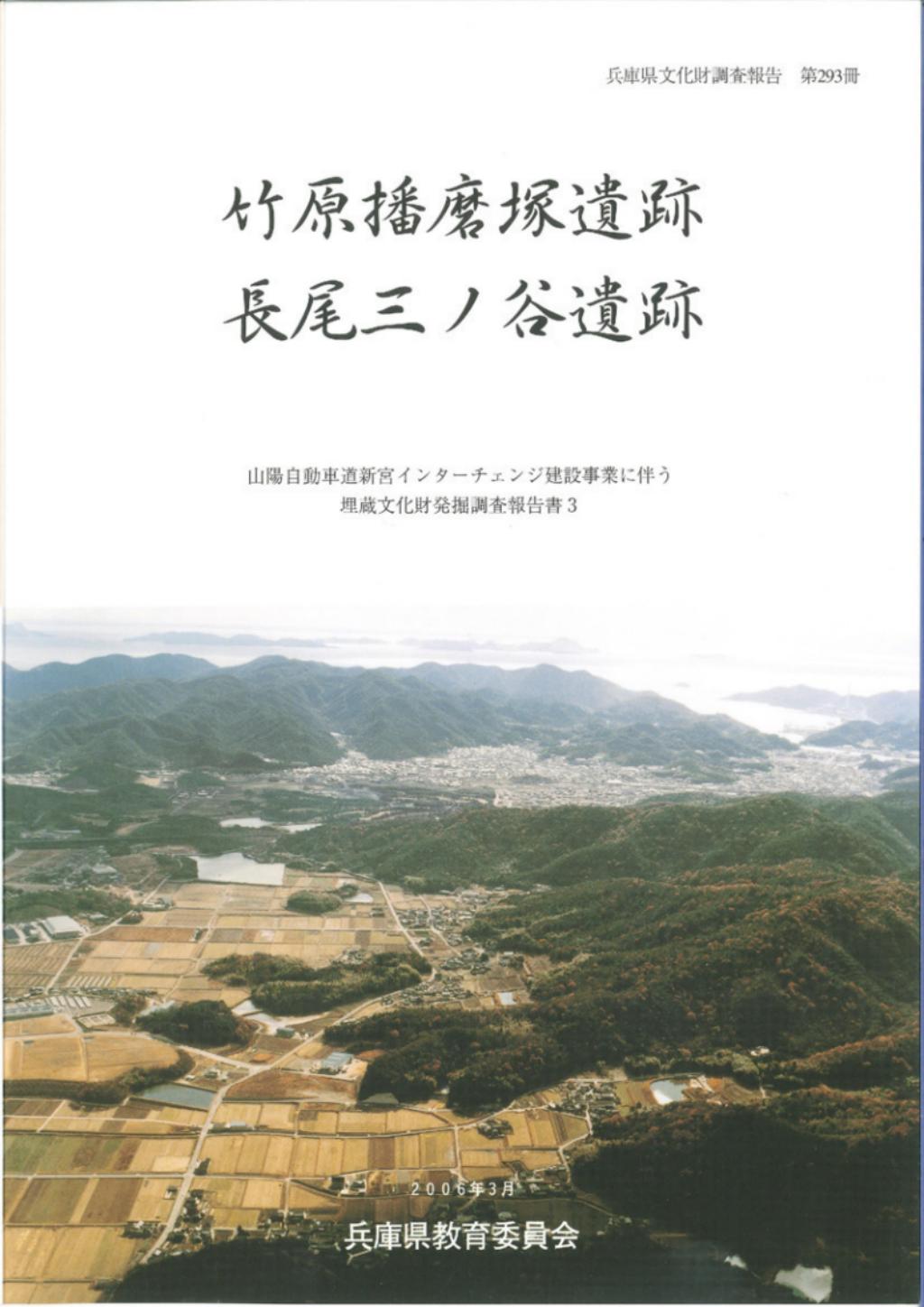


# 竹原播磨塚遺跡 長尾三ノ谷遺跡

山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 3



2006年3月

兵庫県教育委員会

竹原播磨塚遺跡  
長尾三ノ谷遺跡

## 例　　言

1. 本書は、兵庫県龍野市（現たつの市）揖西町竹原字播磨塚に所在する竹原播磨塚遺跡（たけはらはりまづか　いせき）と、同じく龍野市（現たつの市）揖西町の長尾字三ノ谷に所在する長尾三ノ谷遺跡（ながお　みのたに　いせき）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡の発掘調査は、山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業に伴い日本道路公団大阪建設局姫路工事事務所（当時）の依頼を受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
3. 遺跡の本発掘調査は、平成9年度に実施し、調査担当として兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 別府洋二・高木芳史があたった。発掘調査に際しては、株式会社吉田組と作業委託契約を交わして実施した。
4. 報告書作成にかかる整理作業は日本道路公団関西支社の依頼を受けて、平成16～17年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所がおこない、長濱誠司・別府が担当した。また、出土したサヌカイトの分析を(株)パレオ・ラボに依頼した。
5. 掲載した写真については、空中写真は株式会社ワールドに委託して撮影した。その他の遺構写真等は調査担当者によるものである。遺物写真は株式会社アコードに委託して撮影したものを使用した。金属器のX線透過写真は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　金属器保存処理担当　岡本一秀によるものである。
6. 掲載した図については、地形図については国土地理院発行のもの及び日本道路公団提供のものを使用した。その他の図に関しては調査担当者及び嘱託職員他の手によるものである。
7. 発掘調査に際しては、日本道路公団大阪建設局姫路工事事務所（当時）、龍野市教育委員会（当時）や地元の方々にはお世話になりました。また、発掘調査に従事していただいた株式会社吉田組や三和共同建設の方々にも記して感謝の念と変えさせていただきます。
8. 本書の編集は岡崎輝子の補助の元、別府がおこなった。また、執筆は調査担当者によるもので、分担は目次に掲載している。
9. 発掘調査中、整理作業中には以下の方々に様々な御指導、御教示を受けました。記して感謝いたします。  
(順不同、敬称略)  
岸本道昭・野村辰右・山本三郎・岡田章一・森内秀造・池田征弘

# 目 次

## 本文目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	(別府)
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の環境	(別府)
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 竹原播磨塚遺跡の調査	
第1節 概要	(別府) 5
第2節 遺構	(別府) 6
第3節 遺物	(別府・高木) 7
第4節 小結	(別府) 11
第4章 長尾三ノ谷遺跡の調査	
第1節 概要	(別府) 13
第2節 遺構	(別府) 13
第3節 遺物	(別府・高木) 15
第4節 小結	(別府) 19
第5章 長尾三ノ谷遺跡出土サヌカイトの産地推定	(パレオ・ラボ) 22

## 図版目次

- 図版1 遺跡の位置  
図版2 竹原播磨塚遺跡 周辺の地形と調査範囲  
図版3 竹原播磨塚遺跡 遺構配置図  
図版4 竹原播磨塚遺跡 調査区南壁基本土層図  
図版5 竹原播磨塚遺跡 SX1  
図版6 竹原播磨塚遺跡 SX2  
図版7 竹原播磨塚遺跡 SX3  
図版8 竹原播磨塚遺跡 掘立柱建物 SB1・SB2  
図版9 竹原播磨塚遺跡 掘立柱建物 SB3、土坑 SK1・SK2  
図版10 竹原播磨塚遺跡 出土遺物(1)  
図版11 竹原播磨塚遺跡 出土遺物(2)  
図版12 竹原播磨塚遺跡 出土遺物(3)  
図版13 竹原播磨塚遺跡 出土遺物(4)  
図版14 竹原播磨塚遺跡 出土遺物(5)  
図版15 長尾三ノ谷遺跡 周辺の地形と調査範囲  
図版16 長尾三ノ谷遺跡 北地区遺構配置図と基本土層図  
北地区・南地区基本土層図土層注記  
図版17 長尾三ノ谷遺跡 南地区遺構配置図と基本土層図  
図版18 長尾三ノ谷遺跡 壘穴住居 SH1  
図版19 長尾三ノ谷遺跡 壘穴住居 SH2  
図版20 長尾三ノ谷遺跡 掘立柱建物 SB1・SB2  
図版21 長尾三ノ谷遺跡 出土遺物(1)  
図版22 長尾三ノ谷遺跡 出土遺物(2)  
図版23 長尾三ノ谷遺跡 出土遺物(3)

## 写真図版目次

写真図版 1	遠景	遠景(東から)、遠景(北から)
写真図版 2	竹原播磨塚遺跡 遠景	遠景(東から)、遠景(東から)
写真図版 3	竹原播磨塚遺跡 遠景	遠景、遠景(南西から)
写真図版 4	竹原播磨塚遺跡 全景	全景(南から)、全景(東から)
写真図版 5	竹原播磨塚遺跡 全景	全景(南から)
写真図版 6	竹原播磨塚遺跡 全景	全景(東から)、全景(南から)
写真図版 7	竹原播磨塚遺跡 集石遺構	SX1(北から)、SX1(東から)
写真図版 8	竹原播磨塚遺跡 集石遺構	SX1(北から)、SX1(南から)、SX1(南から)
写真図版 9	竹原播磨塚遺跡 集石遺構	SX1断割状況(南から)、SX1断割状況(東から)、 SX1断割状況(東から)
写真図版10	竹原播磨塚遺跡 集石遺構	SX2(西から)、SX2(南から)
写真図版11	竹原播磨塚遺跡 集石遺構	SX2(東から)、SX2断割状況(南から)、 SX2土器出土状況
写真図版12	竹原播磨塚遺跡 集石遺構	SX2断割状況(南から)、SX2断割状況(西から)、 SX2南の平坦面(東から)
写真図版13	竹原播磨塚遺跡 集石遺構	SX3(南から)、SX3断割状況(東から)、 SX3断割状況(南から)
写真図版14	竹原播磨塚遺跡 挖立柱建物	下層全景(東から)、SB1・2(南から)、 SB1・2(東から)
写真図版15	竹原播磨塚遺跡	SX2南の平坦地、柱穴内土器出土状況、 SK1土層断面(南から)、SK1(南から)、 SK2土層断面(北から)、作業状況
写真図版16	竹原播磨塚遺跡 遺物	土器(1)
写真図版17	竹原播磨塚遺跡 遺物	土器(2)
写真図版18	竹原播磨塚遺跡 遺物	土器(3)
写真図版19	竹原播磨塚遺跡 遺物	瓦
写真図版20	竹原播磨塚遺跡 遺物	土器(4)
写真図版21	竹原播磨塚遺跡 遺物	石器・金属器

写真図版22	長尾三ノ谷遺跡	遠景	遠景(東から)、遠景(東から)
写真図版23	長尾三ノ谷遺跡	遠景	遠景(南から)、遠景(北から)
写真図版24	長尾三ノ谷遺跡	全景	北地区
写真図版25	長尾三ノ谷遺跡	全景	北地区全景(東から)、北地区全景(南から)
写真図版26	長尾三ノ谷遺跡	全景	南地区
写真図版27	長尾三ノ谷遺跡	南地区	南地区全景(東から)、南地区北半(東から)
写真図版28	長尾三ノ谷遺跡	南地区	南地区全景(西から)、南地区北半(西から)
写真図版29	長尾三ノ谷遺跡	堅穴住居	SH1(北から)、SH1(南から)、SH1(西から)
写真図版30	長尾三ノ谷遺跡	堅穴住居	SH1土層断面(西から)、SH1土層断面(西から)、 SH1土層断面(南から)、SH1土層断面(南から)、 SH1土器出土状況
写真図版31	長尾三ノ谷遺跡	堅穴住居	SH1・2(南から)、SH2(南から)、 SH2中央土坑(北から)
写真図版32	長尾三ノ谷遺跡	掘立柱建物	SB1(南から)、SB1(東から)、SB1北端柱穴(東から)
写真図版33	長尾三ノ谷遺跡	盛土護岸	盛土護岸(西から)、盛土護岸(東から)、 盛土護岸(北から)
写真図版34	長尾三ノ谷遺跡		盛土護岸(東から)、盛土除去(南から)、 盛土除去(北から)、SD1土層断面(東から)、 調査地区から東を望む、調査状況
写真図版35	長尾三ノ谷遺跡	遺物	土器(1)
写真図版36	長尾三ノ谷遺跡	遺物	土器(2)
写真図版37	長尾三ノ谷遺跡	遺物	土器(3)
写真図版38	長尾三ノ谷遺跡	遺物	土器(4)
写真図版39	長尾三ノ谷遺跡	遺物	土器(5)・瓦
写真図版40	長尾三ノ谷遺跡	遺物	石器(1)
写真図版41	長尾三ノ谷遺跡	遺物	石器(2)

# 第1章 調査に至る経緯と調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

山陽自動車道新宮インターチェンジ事業は、山陽自動車道龍野西ジャンクションと主要地方道相生山崎線新宮インターチェンジとを結ぶ南北の連絡道として、日本道路公団大阪建設局姫路工事事務所によって計画された。この事業は、兵庫県が推進する西播磨テクノポリス計画の拠点都市である播磨科学公園都市へのアクセス道路として計画され、龍野市揖西町土師より龍野市西部を北上し、相生市の北東部を通過して、揖保郡新宮町の南西部に入り、揖保郡新宮町角龜に至る、延長12.6kmの自動車専用道路の建設事業である。

事業計画地内や周辺には、人跡古窯跡群や小丸遺跡の存在が知られており、また古代山陽道を横切っていることから、事業用地内にその他の埋蔵文化財が存在することが予想された。このため平成6年度には兵庫県教育委員会により事業用地内の分布調査を実施、その後数次にわたって工事用道路等の分布調査を行い、平成8年度から逐次確認調査を実施した。

## 第2節 調査の経過

### 1. 分布調査

平成6年度の分布調査によって、谷内や緩斜面で須恵器片などが採集されたことによって、集落や窯址などの遺跡の存在が推定されたことから、№.4地点、および№.6地点として登録された。さらに平成7・8・9年度には工事用道路部などの分布調査を実施し、№.4-B地点や№.6地点の一部が追加登録された。

### 2. 確認調査

№.4地点の確認調査は平成8年10月と平成9年2月におこなわれ、遺物包含層や柱穴が認められ、多量の須恵器が出土したことから、本発掘調査が必要と判断された。龍野市教育委員会との協議によって、№.4地点は慣例により所在地の大字と小字名から「竹原播磨塚遺跡」と呼称されることとなった。この遺跡は窯址の存在の可能性が高いことが推測されたため、平成9年5月には追加の確認調査を実施し、調査範囲の絞り込みをおこなった。また、工事用道路部分の№.4-B地点及び№.4-C地点については平成10年2月と11月にも確認調査を実施したが、この地点では本発掘調査に至るような遺構などは検出されなかった。(図版2)

№.6地点の確認調査は平成8年5月に一部実施され、遺物包含層が確認された。平成9年5月には本線部分の確認調査を実施し、遺物包含層のみならず、遺構が部分的に存在することが判明し、№.6地点は所在地の大字と小字名から「長尾三ノ谷遺跡」と呼称されることとなった。また、平成11年3月、平成12年5月には周辺の保安林部分等の確認調査を実施したが、遺構等は検出されなかった。その際に、№.6地点の南側の路線外に、竹原播磨塚遺跡で確認されたものと類似した集石遺構が存在することが判明し、平田山遺跡の一部として登録された。(図版15)

### 3. 本発掘調査

竹原播磨塚遺跡（№.4 地点）では、確認調査において窯址本体や灰層などは検出されなかつたが、多くの須恵器片や窯址に付隨すると考えられる柱穴などが検出されたことから、集落址及び窯址の一部が検出されるもの想定して本発掘調査を開始した。調査範囲内は竹林となっており、竹林は本体工事に伴つて伐採された。重機によって表土や竹の根の除去を行つたところ、確認調査で判明していた縁を伴う包含層が、一定範囲内で途切れることがわかつた。これにより、縁が出土する箇所については、機械掘削深度を浅くし、他の遺物の出土が少ない箇所については、遺構面まで機械によって掘削をおこなつた。調査が進展するにつれ、縁群は積石塚状の集石として三ヶ所で検出され、その下層に集落址が存在することが判明した。積石塚状の集石は中世墓の可能性を考えて調査を進めたが、墓と断定できる状況は見出せなかつた。

長尾三ノ谷遺跡の調査地点は、現在の溜池の西岸に接した南地区と、その北側の北地区に分かれ、各々重機によって表土等を包含層上面まで掘削した。包含層から遺構検出面までは人力により掘削し、遺構の調査をおこなつた。遺構は耕土直下で検出される場所では削平が著しく、遺存状況は場所によって異なる。溜池や耕地造成のために大きく改変されているらしい。南地区では2棟の竪穴住居や掘立柱建物、流路が検出され、弥生時代から中世に至る遺跡であることがわかつた。

遺跡の調査は、小犬丸中谷庵寺・長尾三ノ谷遺跡・竹原播磨塚遺跡の順で行い、かなりの期間は3遺跡同時に発掘を実施している。また、担当者の一人である高木が研修の間は調査第1班班長である山本三郎が遺構実測等の調査にあつた。各遺跡・調査地区で検出された遺構は、調査員によって写真・実測図などの記録に留め、全景・遠景などはヘリコプターによる空中写真撮影をおこなつた。

本発掘調査の担当者は以下のとおりである。

調査第1班 調査専門員	山本 三郎
主 査	別府 洋二
研 修 員	高木 芳史
室内作業員	森崎由起子

### 4. 出土品整理作業

発掘調査によって出土した土器等の遺物は、発掘調査現場事務所にて洗浄をおこない、一部についてはネーミングをおこなつた。平成16年度には、埋蔵文化財調査事務所にて出土した土器の接合・復原作業を開始し、遺物の実測・写真撮影、金属器の保存処理を実施し、平成17年度にはトレース及びレイアウト作業をおこない、原稿執筆とあわせて報告書を刊行した。原稿執筆は別府が担当したが、一部の原稿については 高木（現兵庫県立須磨友が丘高校教諭）に依頼した。

整理作業の担当は以下のとおりである。

整理保存班	主任調査専門員	池田 正男
同（平成16年度）	主 査	長濱 誠司
同（金属器保存担当）	主 任	岡本 一秀
調査担当者	主 査	別府 洋二
非常勤嘱託職員	岡崎輝子・川村由紀・長川加奈子・島村順子・ 中田明美・三好綾子・栗山美奈・藤井光代・ 三島重美・豊田貞代・森田美穂	

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

竹原播磨塚遺跡、長尾三ノ谷遺跡は兵庫県たつの市揖西町に所在する。たつの市は平成17年10月に龍野市と新宮町、揖保川町、御津町が合併してできた新市であり、揖西町は旧龍野市の西端に位置する。揖西町の東には揖保川が南流し、北と西と南の三方を山塊に囲まれた盆地状の低地が広がり、三方の山塊に切れ込んだ大小の谷や独立山塊が点在する地形をもつ。低地には三方の山塊から流れ出す中垣内川や古子川、小犬丸川などの小河川が注ぎ込み、流れは最終的に東流して揖保川に合流する。

両遺跡はこの盆地状地形の西端に位置し、山塊の裾の小尾根上や谷内に立地する。この山塊を西に越えれば旧赤穂郡となる。竹原播磨塚遺跡(1)の標高は約45m、長尾三ノ谷遺跡(2)の標高は約54mを測る。

### 第2節 歴史的環境（図版1）

この揖西の地に人々の生活した痕跡が激増するのは、弥生時代中期中葉からである。清水遺跡、尾崎遺跡(3)、北山遺跡(4)など河川に沿った低地に発生した集落は、その後、小神辻の堂遺跡、佐江遺跡、長尾谷遺跡(5)、北沢遺跡(6)、龍子向イ山遺跡(7)、養久山・前地遺跡(8)、小犬丸大谷遺跡(9)、竹原中山遺跡(10)など拡散し、丘陵上や深い谷の中にまで立地する集落が見られるようになる。その中核的な集落は中垣内川流域の清水遺跡と佐江遺跡と考えられている。

弥生時代終末から古墳時代初頭の集落は小神南遺跡や北山遺跡、小神辻の堂遺跡、小畠十郎殿谷遺跡(11)などで単発的に住居址が見つかっているが、比較的の規模は小さい。この時期にこの地域を特徴づけるものに養久山山塊や半田山、白鷺山などで見つかった墳丘墓や前期古墳などがあるが、その墳墓を支えた中心集落はまだ確認されていない。

古墳時代の前期から中期にかけては、三角縁神獸鏡を出土した龍子三ツ塚古墳(12)を中心として、鳥坂古墳群(13)、新宮東山古墳群(14)、南山古墳群(15)、友ヶ谷古墳群(16)などの中小の古墳が築かれる。後期になると長尾タイ山古墳群(17)などの初期群集墳と言える古墳群やそれに伴う集落である長尾谷遺跡が知られ、尾崎遺跡からは碑式土器が発見されるなど渡来人の定着を示す遺物も見つかっている。竹原播磨塚遺跡の背後の山頂には播磨塚古墳(18)が築かれ、字名の由来とも言われている。また、後期には小規模な群集墳が見られるようになり、長尾三ノ谷遺跡の北麓にも終末期の単独墳である長尾薬師塚古墳(19)が築かれる。

古代には山陽道に沿って小神庵寺、中垣内庵寺(20)、小犬丸中谷庵寺(21)などの寺院址や、布勢駅家(22)や揖保郡衙関連の小神芦原遺跡、皇朝十二鏡が出土した尾崎台山遺跡(23)なども見つかっている。

揖西町の西端の山塊周辺には5世紀末から6世紀初めの那波野丸山窯(24)から始まる相生・龍野窯址群が展開している。この鎌倉時代まで続く窯址群は旧赤穂郡に属する相生市側の西部と、旧揖保郡に属する龍野市側の東部に分かれ、東部は更に那波野地区・揖西地区・光明山地区に分かれる。光明山地区は市境を挟んだ標高200m前後の尾根稜線付近に分布し、8世紀代の窯が築かれる。揖西地区には大陣原窯址群(25)や竹原窯址群(26)が含まれ、7世紀代から生産が始まり、9世紀まで続くが、一旦その火は消える。11世紀末から12世紀になると再び窯が築かれ、瓦陶兼業窯が見られるようになり、12世紀末頃の竹原窯址群(27)まで続いている。今回報告する遺跡から出土した須恵器や瓦の多くはこれらの近隣

の薫からもたらされたものであろう。

「続左丞抄」左弁官下文 建久八年（1197年）四月三〇日「壬生文書」によると、この地を巡る土地争いがおこる。すなわち、穀倉院領小犬丸保と大納言平頼盛領布施莊との間の境相論である。布施郷が応保年中（1161～1163年）に平清盛の異母弟である頼盛の家領となり布施莊が成立するが、ここには以前から穀倉院領の小犬丸保が成立していた。そのため頼盛は強引に山野・畠地・在家・池を犯し、小犬丸保の領有権を作田のみに限った。そこで小犬丸保の領民が訴状を出したものである。この訴状の中で領民は「往古計略を廻らせ、功力を尽し、更に池を構築し、作田に引き入れた。」とあり、12世紀中頃までに地元の百姓が溜池を修築したことが見えている。

平家滅亡後、この地は布施莊が平家没官領として収公され、播磨国が後白河法皇の分国になった寿永二年（1183年）以降に穀倉院領に復す。しかしながら梶原景時が播磨守護となると、地頭・莊官などとして源氏方の武士が入り込み、法皇管領の莊園などをも押領し治安は著しく乱れる。

掛西町の低地の北縁には龍野・上郡断層が東西に貫き、古代山陽道はその断層に沿って走っていた。中世に入ると、より直線的な街道「筑紫大道」が約1km南側に設けられるが、長尾三ノ谷遺跡のある谷に向かって延び、その手前で方向を変えて古代山陽道へと合流するものと想定されている。

続く時代は悪党の全盛期であり、この地域の悪党的人物の代表として赤松円心がいる。円心は建武年中（1334～1338年）、長尾三ノ谷遺跡の西背後に光明山城（28）を築いている。この城は、別名紫雲城や小犬丸砦などとも呼ばれ、西の惑状山城・白旗城から東の平井城・龍野城に通する山陽道の要衝を扼する城である。赤松上総介義則などが居城としたとあり、天正（1573～1592年）初め頃、羽柴秀吉の播磨攻略によって落城したといわれている。

〔註〕文中の（番号）は、図版1に対応している。

#### 【参考文献】

- |           |      |   |
|-----------|------|---|
| 田中真吾・後藤博彌 | 1978 | 「龍野とその周辺の地質と地形」『龍野市史』第1巻 龍野市                                |
| 石田善人      | 1978 | 「中世の龍野」『龍野市史』第1巻 龍野市  |
| 岸木道昭      | 1994 | 「断絶の中期と後期－西播磨旁宗生社会の理解のために－」<br>『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3 財團法人大阪文化協会 |
| 野村風右      | 2001 | 「柏生・龍野古窯跡群について」『ひょうご考古』第7号                                  |
| 龍野市教育委員会  | 1992 | 『布勢駅家』龍野市文化財調査報告8   |
| 龍野市教育委員会  | 1993 | 『布勢駅家Ⅱ』龍野市文化財調査報告11   |
| 龍野市教育委員会  | 1998 | 『長尾・小畑造跡群』龍野市文化財調査報告21                                      |
| 龍野市教育委員会  | 1998 | 『竹原遺跡』龍野市文化財調査報告22  |
| 兵庫県教育委員会  | 1987 | 『小犬丸遺跡』兵庫県文化財調査報告書 第47号                                     |
| 兵庫県教育委員会  | 1994 | 『柏生市・緑・丘窯址群Ⅱ』兵庫県文化財調査報告 第139冊                               |
| 兵庫県教育委員会  | 2003 | 『小犬丸大谷遺跡』兵庫県文化財調査報告 第265冊                                   |

# 竹原播磨塚遺跡



## 第3章 竹原播磨塚遺跡の調査

### 第1節 概 要

前章すでに述べたように、揖保川の右岸にあたる揖西平野の東端に位置する長尾・竹原・大陣原の丘陵上には多くの須恵器や瓦陶兼業の窯が存在している。この播磨塚遺跡も分布調査当初は多くの須恵器が散布していることから、須恵器窯跡の存在が予想されていた。

確認調査は、道路本体（竹原高架橋部）及び工事用道路、河川付け替え部で実施した。周辺部、特に南側の溜池（大照池）付近では須恵器を主とした遺物は出土したが、遺構や灰原は確認できなかった。遺構が確認できたのは尾根上の緩斜面で、柱穴が見つかったが、窯跡に関連する遺構は不明であった。このため、追加の確認調査を行ったが、やはり須恵器窯跡に関連する遺構は検出されず、礫とともに多くの須恵器等が含まれる包含層や柱穴が検出された。

本発掘調査は小丸中谷庵寺や長尾三ノ谷遺跡の調査と並行して平成9年8月から翌平成10年1月にかけて実施した。当初想定されていた窯跡の存在は確認調査時には不明であったため、本発掘調査時の重機掘削に際しては慎重に対応した。その結果、確認調査時に礫を伴った包含層と考えていた地点で、その礫が面的に広がりをもつことが判明した。このような礫の広がりは塚状に高さを持っており、3ヶ所で確認できた。また、集石周辺から検出された柱穴や溝の一部が、集石の下部にまで及んでいることから、上下2面の時期の遺跡であることがわかった。確認調査の結果、本発掘調査の南北の地点では遺構は検出されていないことから、この遺跡の本体部は調査範囲内やさらに西側に続く尾根平坦部に限られるのであろう。

調査地点は、東向きに開いた谷を流れる小河川である前川が、平地へ降りる直前の南側の斜面で、北東に向いた小尾根先端にあたる。調査地点の南側は更に小さな谷があり組み、溜池（大照池）が構築されている地形となる。北側も確認調査の結果、谷状地形の埋没状況が看取され、盛土をしてテニスコートや住居に利用されている。東側も地形的に傾斜を変えて落ちていく。遺跡の小尾根は周辺の尾根と比べて緩やかで、先端部は平坦に近い。遺跡はこの谷の中の小尾根上の緩斜面といった限られた範囲内に作られている。

調査範囲は字「播磨塚」に含まれていることから龍野市教育委員会と協議の上、播磨塚遺跡と呼称することになった。北側の前川を中心とした谷の中は字「奥ノ谷」が広がり、谷を越えた北側の丘陵も再び字「播磨塚」となる。南側は溜池の部分に字「大照宮」が東から入り組むが、字「播磨塚」が続き、丘陵部は字「小谷山」、字「釜谷」となる。このように遺跡名を取った字「播磨塚」の占める範囲は広く、南西の丘陵上に存在する播磨塚古墳（前方後円墳）から字名が名付けられたと考えられるが、今回検出された中世の「塚」を播磨塚と呼んでいた可能性も捨てきれない。南側や東側に広がる「大照宮」(たいしょうぐう?)も祭祀に関わる名称であり、祭祀や中世墓の存在する場所にしばしば見られる「大将軍」の字名がなまって転訛したものかもしれない。また「釜谷」の字名が南側や西側に広がることは、須恵器窯が周辺に存在することを窺わせ、東の尾根斜面に1基存在する。また、この周辺では数基は丘陵頂上付近にも築かれている。調査結果から、調査地点の西側近辺にも窯が存在する可能性は極めて高い。

## 第2節 遺構

調査範囲内は西から東へと緩やかに傾斜しており、遺構は塚状を呈する3基の集石遺構（SX）などの上面遺構と、その集石遺構の下面にも広がる柱穴・溝・土坑などの下層の集落関連遺構に分けられる。但し、集石遺構の時期に対応する柱穴などは逐次抽出できなかったため、下層の遺構として一括で報告する。

### 上層の遺構

#### 1. 集石遺構（塚）

##### SX1（図版5）

SX1は、直径約6mの円形或いは隅丸方形の範囲に礫を積み上げて作られた塚である。今回検出された3基の中でも最も南側で、比高の高い位置（標高約47m）に築かれており、規模の大きなものである。西方の山側には半周ばかり浅い周溝状の落ち込みが巡る。

積石は旧表土上に入頭大のやや大きな石を不規則に積み上げ、その上に拳大の礫を主として、土器片などを交えながら土と共に、現存高約0.5mまで積み上げている。南側にも旧表土上に礫を並べる。含まれる土器片には土師器・須恵器・陶磁器・瓦など様々なものが含まれており、意図的に供えられた状況は見られない。南側では溝や平坦面が作られ柱穴が集中したが、周辺で検出された柱穴や小溝の続きが礫下の旧表土下で検出されている。積石下部ではこの塚に伴うような土壇等の遺構は検出されていない。

##### SX2（図版6）

SX2はSX1の西側に約10mの距離をおいて、3基の中で最も低い位置に築かれている。トレントによって一部を削平したが、長径約5.5mの不整五角形の平面形を呈している。積石の南側、五角形の最も長い辺の前面には平面形が方形の一段低い平坦面が作られている。平坦面には柱穴が見られるが、1間×2間以上の建物は復元できない。更にその前面には浅い溝が東西方向へ延びており、南東の斜面下方からこの塚を通り、SX1へと向かう参道状の痕跡ではなかろうか。

SX2も旧表土上に入頭大の礫を2m×1mの長方形に並べた上に拳大の礫や土器片、土を約0.6mまで積み上げている。SX1同様多くの土器が含まれていたが、瓦片が多く見られることが特徴的である。積石下層からはこの塚に伴うと考えられる土壇などは確認されなかった。

##### SX3（図版7）

SX3は北端で検出された。トレントによって一部削平されているほか、重機掘削時の最も早い段階で検出したため残りは悪いが、当初から積石の高さは低く、石の密度も疎であった。平面形が一辺約3.5mの不整形を呈しており、高さも0.3mと他の2基に比べて規模の小さなものである。調査範囲に統く北側は抜根のためか、大きく搅乱されていることから範囲を拡張することはしなかった。

用いられている礫は直径20cm以下の小さなもののがほとんどであり、構造的にも礫が使われているのは表面のみである。礫に混じる土器も他の2基に比べて少量である。下層からは掘立柱建物SB1の一部が検出されたが、塚に伴う土壇等の遺構は確認できなかった。

## 下層の遺構

### 2. 土坑（SK）

#### SK1・2（図版9）

SX1とSX2の中間の位置に、平面形が長方形を呈する土坑が2基並んで検出された。主軸の方向はSB1等に一致するが、ほぼ等高線にのる。SK1は長辺約2.3m、短辺約0.8m、深さ約0.3mの土坑である。平面形が長方形を呈し、壁も垂直に近い角度で立ち上がるから、墓壙の可能性がある。遺物は白磁3類玉環口縁や須恵器の小片が出土している。SK2は長辺約1.2m、短辺約1.0m、深さ約0.2mの土坑である。一方の壁は垂直に近く立ち上がるが、底面が水平ではなく墓壙とするには躊躇される。SK2からは図化できなかったが、須恵器・土師器の小片が出土しており、備前焼の破片も出土していることから、上層の時期に対応するものかもしれない。

### 3. 挖立柱建物（SB）

掘立柱建物は3棟復元できたが、発掘調査中に復元したものはSB1の1棟のみである。他にもSX1の南側で柱穴が集中しており、複数棟存在するようだが、復元できなかった。

#### SB1（図版8）

SX3の下層から検出された2間×3間の南北棟の掘立柱建物である。柱間は桁行で2.2～2.4m、梁間は1.9～2.1mである。北縁中央のP82から54の白磁皿が出土している。西側に近接して深さ約0.7mの円形の土坑が設けられており、多くの礫が充填されていた。礫はSX3に伴うものかもしれないが、遺物は出土していない。

#### SB2（図版8）

SB1の西側に接するように2間×3間の側柱のみの南北棟建物が検出された。主軸方位はSB1とはややずれている。柱間は1.8～3.1mと不均等である。時期の決定できる遺物は出土していない。

#### SB3（図版9）

SB2の南側、SX1の東側には柱穴が集中しており、南北棟の掘立柱建物を復元した。床束柱状の柱穴をもつ建物で、柱間は不均等である。この他にもSX1の南側やSX2の南側で柱穴が集中する地点があるが、建物を復元するには至らなかった。

## 第3節 遺 物

### 1. SX1出土土器（図版10・11）

1～28はSX1の積石に混じって出土した土器・瓦である。

1は土師器小皿である。糸切りの底部からユビオサエを残しながら、ヨコナデで仕上げる。底部内面には仕上げナデを施す。口径約7.6cm、器高1.5cm。

2は土師器三足鍋の脚部である。中実の脚部先端を屈曲させて接地に備える。器面は縦方向にイタナデ状に整える。

3は土師器甕で、粘土紐の積み上げ痕を残しながら、ヨコナデで仕上げる。外面にはススが付着する。

4・5は土師器甕で、4は胴部から直角気味に開き、やや内溝する口縁部へと続く。外面は縦方向のハケの後、ヨコナデで仕上げ、内面は胴部・口縁部とも横方向のハケで調整する。口縁端部はヨコナデ

によって端面を作っている。外面にはススが付着する。

5はやや肩が張った胴部から直角気味に開く口縁部へ続き、内外に拡張して上面と側面を作り出す端部をもち、内面は蓋受け状の屈曲をもつ。胴部外面は指頭圧痕を残して、縦方向のハケからナデで仕上げる。胴部内面は横方向のハケを施す。口縁部の内外面は横方向のハケの後、ケズリのような強いナデを施す。

6は土師器羽釜である。内傾する胴部に水平方向の鎌が取り付く。口縁部は内傾した後、端部を短く上方に屈曲させている。胴部外面は縦方向のハケ。鎌から口縁部はヨコナデで仕上げる。内面は横方向のハケで、口縁端部はヨコナデで仕上げる。鎌の下面にススが付着する。

7は瓦質の羽釜で、鎌の上下は強いヨコナデを施す。口縁部はやや内側を向いて端面を作る。摩滅のため調整は不明である。

8~17は須恵器碗である。全て糸切りの底部をもち、14を除くと高台は突出しない。底部内面には複数方向の仕上げナデを施すが、10・16のように見られないものもある。底部は14のように低い高台状になり、内面を一段低くするものもある。8・9のように杯状に内湾して立ち上がるものがある。8は小型のもので、口径約8.4cm、器高3.6cm底径4.6cmを測る。9は1/3の残存率で、口径13.5cm、器高5.6cm、底径5.5cmを測る。11・12の口縁部は歪が大きく、11では口径15.5cm、器高5.0cm、底径6.3cmを復元できる。

18・19は須恵器甕の底部と考える。19は底面を銛利な刃物で不定方向にヘラ切りしている。

20・21は須恵器甕の口縁部で、大きく外反し、端部の下方を少し拡張して端面を作っている。回転によるナデで仕上げるが、20は肩部にタタキが残る。

22は外面に平行タタキを施した須恵器甕の胴部と考えるが、他のものと異なり、内面にハケを施す。

23は瀬戸灰釉陶器平碗である。糸切りの底部を浅く削り出してわずかに高台を作る。大きく直線的に開いた体部から外面を強くヨコナデして尖らせ気味に丸く収めた口縁部へと続く。内外面に10YR4/2オリーブ灰色の釉をかけているが、体部下半から底部は露胎である。

24・25は青磁碗である。24は無紋の碗で内湾して立ち上がり、口縁端部をわずかに外反させる。25は内湾して立ち上がり、丸く納める口縁部へと続く。25は外面に櫛描き施紋を、内面にヘラ描きと櫛描き施紋するもので、12世紀後半から13世紀前半の同安窯系の青磁である。

26・27は白磁碗である。26は玉縁の口縁部である。27はやや高く削り出した底部で、外面は露胎、内面には沈線状の段をもつ。意図的に打ち欠いており、印字打ちに再利用されたものであろう。

28は土師質の丸瓦で、摩滅のためか内面の布目も見られない。

## 2. SX2出土土器(図版11・12)

29から45はSX2から出土した土器、瓦である。

29は土師器鍋口縁部である。内湾気味に立ち上がる胴部から屈曲して大きく開く口縁部へと続く。口縁端部は上方に屈曲し、拡張して面をもつ。胴部外面は縦方向のハケによって調整している。口縁部はヨコナデによって仕上げる。内面は横方向のハケで調整する。

30・31は須恵器碗である。30は糸切りの底部から内湾して立ち上がる体部へと続く。底部内面の仕上げナデは見られない。

31は30のように糸切りの底部から内湾して立ち上がる体部に続くが、底部に高台を貼り付けている。高台はやや外開きで、端部は丸く収める。底部内面には不定方向の仕上げナデを施す。

32は須恵器鉢で、直線的に開く口縁端部はわずかに外側を抜み出して上端面を窪ませるが、平坦である。

33・34は須恵器壺である。肩部から短く直立する頸部へ続き、短く外反して丸く収める口縁部が付く。

肩部には平行タタキの痕跡がかすかに残り、回転によるナデによって仕上げている。内面も回転によるナデで仕上げているが、粘土紐の痕跡やユビオサエが残される。

35～37は須恵器甕口縁部である。35は口縁端部を上下に拡張して端面を作る。内外面ともヨコナデで仕上げる。

36は大きく開く口縁の内面端部直下を強くナデて窪ませる。外面は肩部から口縁直下まで平行タタキが残る。内面はヨコナデで仕上げる。

37は大きく開く口縁部で、外方に端面を作る。頸部外面には斜め方向のハケメが残り、それを消すように肩部には平行タタキを施す。内面は回転によるナデで仕上げるが、一部に布目が残り、ナデの原体の痕跡であろう。

38は備前焼壺口縁部である。玉縁状を呈した口縁部はヨコナデで仕上げる。

39・40は丸瓦である。39は有段の玉縁丸瓦で、内面には布目がよく残される。端面には線状の圧痕が観察される。40の側面では凹面側を削って調整している。凸面には丁寧にナデ調整がおこなわれているが、繩叩きと思われる痕跡が残されている。

41～45は平瓦である。41・42・43は灰白色に焼成されており、凸面に縱方向の繩叩きの痕跡を残す。凹面には粘土板を切った糸切り痕を残し、一部には布目が観察される。側面は凸面から切っており、不調整であるが、41では凹面側で粘土板端まで至っておらず段が残る。端部の調整も見られない。

44・45は須恵質に焼成されており、側面・端面とも不調整である。44の凸面には須恵器に用いられるような縱方向の平行叩きが残されており、凹面には布目がよく残されている。45の凸面には斜格子の叩きが残されており、凹面の一部に布目が観察できる。

### 3. SX3出土土器（図版13）

46～48はSX3出土の土器である。

46は須恵器杯蓋である。端部に融着の痕跡が残る。

47は須恵器碗底部である。糸切りの底部から内湾して立ち上がる体部へと続く。仕上げナデは見られない。底径4.4cmで8と同様の小型のものである。

48は糸切り底部に付け高台を付したもので、底部内面には仕上げナデを施す。

### 4. 土坑・柱穴等出土土器（図版13）

49はSK1出土の白磁碗玉縁口縁部である。

50はSD3出土の白磁碗玉縁口縁部である。

51～63は柱穴出土の土器である。51～53は上師器、55～63は須恵器である。

51はP60出土の小皿で、手づくねで作られる。内面にはハケメを残してナデ調整を行う。

52はP18出土の托状の土師器で、糸切り平高台底部から大きく開く体部を持つものであろう。

53はP1出土の鍋で、内湾しながら立ち上がり、屈曲して外反して開く口縁部へと続く。端部は膨らせ気味に丸く収める。外面は多方向のハケで調整し、口縁部はヨコナデで仕上げる。内面は底部が多方向のハケ、胴部から口縁部は横方向のハケで調整する。外面にはススが付着する。

54は掘立柱建物SB1を構成するP82から出土した白磁皿である。ケズリを施した底部からわずかに内湾して大きく広がる口縁部へと続く。底部から体部下半は露胎。底部内面には沈線状の段をもつ。

55～63は須恵器碗で、55はP19から、56はP14から、57はP64から、58はP4から、59はP21から、60はP8から、61はP32から、62はP10から、63はP21から各々出土している。55は小型のものである。

56・58は口縁端部が厚く丸くなり、焼成の悪いものである。底部は全て糸切りであるが、59は48と同様付け高台を付す。62は底部内面に仕上げナデを施す。

## 5. 包含層等出土土器（図版13）

64～72は包含層出土の土器や瓦である。

64は6世紀後半頃の須恵器杯で、46と同様近辺に存在する古墳や同時期の集落から持ち込まれたものであろう。

65は糸切り底部をもつ須恵器碗である。内面に仕上げナデを施す。

66・67は須恵器鉢で、直線的な体部から上方に摘み上げた端部をもつ。66は歪のためかかなり立ち上がる。内面に斜め方向のナデアゲの痕跡がわずかに観察できる。12世紀後半頃の竹原窯跡群のものに類似する。

68・69は須恵器甕口縁部である。68は肉厚で短く外反し、頸部には2条の沈線を施す。

69は大きく外反する口縁部で、外面は粗い縦方向のハケの後、強いヨコナデを施す。頸部内面は不定方向の板ナデを残し口縁部までヨコナデで仕上げる。

70は須恵器甕底部である。底面はヘラ切り後、一部ナデ調整を施し、外面は斜め方向の平行タタキで成形する。内面はナデ調整。

71は須恵質の丸瓦で、凸面は叩きの痕跡をナデ消している。凹面は一部に布目を残すが、縦方向のナデによって調整している。側面は凹凸両面側に面取りを施す。

72は須恵質の平瓦で、凸面には側面に平行する縦方向の繩叩き目を残す。凹面には糸切り痕、布目压痕を残すが、ナデによって調整している。側面・端面とも未調整であるが、端面には压痕が残り、凸面側に粘土がはみ出している。

## 6. 石器・石製品（図版14）

サスカイト製の楔形石器（S1）が1点出土している。平面形は不整な五角形を呈する。1辺に階段状剥離が認められ、残りの片は剪断面で構成されていることから、楔形石器（スポール）と判断した。長さ21.2mm、幅13.0mm、厚さ4.5mm、重さ1.4gを測る。

S2は滑石製の石鏝を再加工したものである。復元内口径約20cmの石鍋の口縁部付近を用いており、鏝の部分を丁寧に削り、他の部分も同様に鑿跡を入れている。口縁端部以外の周囲は破面で、再加工後に破損したものかもしれない。縦4.2cm、横9.7cm、厚さ1.7cmの大きさを残す。

## 7. 金属器（図版14）

金属器は鉄器を9点図化できた。すべて重機掘削時や包含層、確認調査時に出土したもので、遺構に伴うものはない。下層の遺構掘削時にはまったく出土しなかった。

M1～3は角釘で、頭部を叩き延ばした後、折り曲げている。M3は頭部を欠損している。M1は長さ約7.3cm、幅・厚さ約0.7cmを測る。

M4～8は板状の鉄片である。M5は先細りの形状から刃物の柄部の可能性がある。M6とM7は同様に細い板状のものを折り曲げて加工している。M8は鍛造品の可能性があり、鋤先などの破片かもしれない。

M9は円盤状の製品で、X線撮影を行って観察すると、中空であることが判明した。2枚の中膨らみの円盤を重ね合わせ、周囲を別の帶状の板で覆ったものと推測される。

## 第4節 小 結

出土した遺物から遺跡の時代を判断すると、最も古いものはサヌカイト製の石器である。近隣の丘陵上には竹原中山遺跡のような弥生中期後半の集落が、平地部や谷内には長尾三ノ谷遺跡のような弥生時代中期中頃の集落が存在しており、いずれかの弥生集落からもたらされたものであろう。また、6世紀末頃の須恵器が数点出土しているが、これも周辺に存在するといわれる古墳や集落からもたらされたもので、直接この遺跡の年代とは関わらないと考える。

その他の遺物から見ると、土師器は13世紀後半から14世紀後半にかけてのものであるが、集落址としては点数が少ない。最も多く出土しているのは須恵器である。須恵器はほとんどが地元産のものと思われ、おそらく竹原窯のものであろう。竹原窯などの周辺の窯跡群は12世紀には途絶するといわれており、土師器との年代差がある。青磁・白磁、瀬戸灰陶陶器や備前、石鍋など他地域からもたらされたものも含めて考えると、12世紀から15世紀の時期が求められる。

上下2面の遺構を検出したが、出土遺物、特に須恵器から時期を判断することは難しい。それは、近辺の窯の製品が、生活用具として使われた以外の理由で持ち込まれた可能性が高いからである。例えば、口縁が歪んだ椀や、用いられた建物の存在が疑われる瓦類である。おそらく西側や谷奥に窯が存在し、流されてきたものや、塚に用いられた石と同様に持ち込まれたものが多く存在するであろう。塚から出土した土器類には様々なものが含まれており、供獻具だけでなく使用痕のある煮沸具や瓦も含まれている。完形品は全くなく、祭祀行為として供えられたというよりは、廃棄された状況に近い。

検出された掘立柱建物や溝などは、狭小な土地に営まれた3～5棟程度の小型の掘立柱建物で構成される小規模な集落であり、あまり長期に亘って営まれた集落とは考えがたい。おそらく12世紀後半から13世紀にかけての集落であろう。この時期の集落はふもとの谷出口周辺でも確認されている。

集落が廃絶した後、塚が築かれる。上層で検出されたSX1～3は、当初は1号塚や1号墓と呼称していたが、調査の結果、備前焼片が出土したSK2や並んで検出されたSK1が木棺墓或いは土壙墓であるなら中世墓に伴う標識としての存在とも考えられるが、塚の下部からは土壙や藏骨器などの埋葬施設は検出されず、墓である可能性は低くなった。中世墓の通例では塚状の標識の周辺や下部に複数の埋葬施設が存在しており、今回のような状況ではない。また、集石内から出土する土器には15世紀頃のものが含まれ、図化できなかったが近世の陶器も上層には含まれていた。つまり13世紀以降築かれた塚は、それ以降江戸時代までは塚として存在しており、一族の墓標などとしての存在というよりは、より広範囲の人々の信仰の対象となっていた可能性が高い。「中・近世において、修驗道や民間信仰から発生した、信仰的行為の具象的な“モニュメント”」(野村1986)としての塚として捉えたほうがよからう。

同様の礎をもって積み上げた塚は、長尾三ノ谷遺跡の南側（長尾平田山遺跡）でも見つかっており、光明山の東麓に点在していることがわかった。また、岡山県の鷺山遺跡群でも同様の集石が検出され、平安時代末から鎌倉時代初めの土器が出土している。

発掘調査の結果、窯跡は検出されなかったが、その須恵器の出土状況から近辺に該当時期の窯が存在する可能性は大きい。出土した遺物の中に数点の瓦が存在するが、もちろん瓦葺の建物があったわけではなかろう。この瓦は近隣の窯址で製作されたもので、土器片と同じ理由で持ち込まれたものであろう。竹原古窯址群は現在約10基の窯が知られており、内1基が発掘調査され、周辺で最も新しい12世紀末頃の窯であることがわかった。竹原古窯址群は大陣原古窯址群とともに相生・龍野窯址群中の掛西地区に属し、奈良時代から始まり、平安時代には瓦陶兼業窯として操業している。

## 〔参考文献〕

- 百瀬正恒・近江俊秀 1995 「各地の土器様相 近畿」  
『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 岡田章一・長谷川眞 2003 「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」  
『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 森田 稔 1995 「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2
- 村上幸雄 1980 「鷺山集石遺跡群」「鷺山遺跡群」久末開発事業に伴う文化財調査委員会
- 野村幸希 1986 「塙」『日本歴史を学ぶ』(中) 有斐閣
- 西口和彦・森内秀造 1986 「相生市・緑ヶ丘窯址群」兵庫県教育委員会
- 森内秀造 1994 「相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ」兵庫県教育委員会
- 森内秀造 1986 「平安時代の窯業生産－播磨地方の須恵器生産を中心に－」  
『北山茂夫追悼日本史学論集 歴史における政治と民衆』
- 池田征弘・服部寛 2002 「相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅲ」兵庫県教育委員会
- 岸本道昭 1998 「竹原遺跡」龍野市教育委員会
- 野村辰右 2001 「相生・龍野古窯跡群について」『ひょうご考古』第7号

# 長尾三ノ谷遺跡

長尾三ノ谷遺跡

長尾三ノ谷遺跡

## 第4章 長尾三ノ谷遺跡の調査

### 第1節 概 要

平成8年4月に工事用道路部分の確認調査（調査番号960043）をおこない、包含層を検出した。平成9年5月には本線道路部分の確認調査（調査番号970153）をおこない、工事予定範囲の一部に造構が存在していることが判明し、地形に即して北地区と南地区の2地点の本発掘調査（調査番号980245）を実施することとなった。

本発掘調査は小犬丸中谷庵寺、竹原播磨塚遺跡の調査と平行して、平成9年8月から平成10年1月にかけて実施した。調査地点は、丘陵や独立丘陵が複数に入り組む揖保川西岸に広がる揖西の平野の西端に位置し、光明山（標高260m）から東へ開く谷の中に存在する。谷内の南側に沿って平田川が流れしており、調査地点の上流で二股に分かれる。また北側からも小さな谷が合流しており、谷の中では比較的広い平地となる。調査地点は谷を堰き止めて作られた溜池のひとつ、長池の上流側に位置する。現況では畠地となっており、北地区では標高54.8m、南地区は標高53.6mを測る。

遺跡名は小字名「三ノ谷」を取って、大字長尾を付した長尾三ノ谷遺跡とした。字「三ノ谷」は調査範囲より西側の谷内を占めており、東側は溜池（長池）の中で字「平田」となる。南側は河川を挟んで字「平田山」、北側の丘陵部は字「葉師山」となる。「三ノ谷」は地元の方々によって「みのたに」と呼ばれている。

本発掘調査後、平田川南側の緩斜面の確認調査（調査番号2000209）をおこなったが、造構は検出されなかった。しかしながら路線外北側に竹原播磨塚遺跡で検出されたような集石を伴う塚状の高まりが2基発見されている。また、北側の谷、斜面や尾根上にもトレンチ（調査番号2000292）を入れたが、岩盤が露出しており、造構・遺物は出土しなかった。

### 第2節 遺 構

#### 北地区（図版16）

北地区では須恵器を中心とした土器を多く含む包含層を検出したが、その下面では溝状の落ち込みを検出できた程度で、柱穴等も確認できなかった。遺物の出土しない所謂地山層の面では、一部に人頭大程度の礫が露出している。包含層と考えていた土層中には近世に屬するものまで含まれており、耕作地を造成する際に持ち込まれた客土である可能性を残している。出土した土器も小片がほとんどであることもその証左である。おそらく造成の際に大きく削平されたことによって、造構も削られてしまったのであろう。南地区で検出されたものと同時期の造構が、より比高の高い北地区でも存在していた可能性は高い。

出土した土器はすべて包含層から出土したもので、溝状の落ち込みなどからは図化できる遺物は出土しなかった。南地区出土の土器と同様に、弥生時代中期、奈良から平安時代のものが中心となるが、15～17世紀にかけての土器も含まれている。

#### 南地区（図版17）

南地区は、東側を長池の堤防に、南側は水路に限られており、北側や西側の畠は確認調査の結果、造構面がすでに大きく削平されていることがわかっている。調査区内は北西から南東へと下がっていく地

形で、南半には流路や溝が東流しており、溝・流路で囲まれた部分には石で護岸し、盛土をおこなっている。北半の微高地では竪穴住居 2 棟、掘立柱建物や柱穴、土坑などが検出された。

南地区から出土した遺物には弥生土器、古墳時代の土師器、奈良から平安時代の土師器・須恵器が主体をなし、包含層からは中世から近世の土器も出土している。また、サスカイト製の石器や石核、剥片も多く出土している。約90基の柱穴中30数基の柱穴から遺物が出土したが、図化できるものは少ない。多くは弥生土器或いは古式土師器などの土師器片である。

## 1. 竪穴住居

### SH1 (図版18)

SH1は南北約4.3m、東西約5.4mの長方形の平面形を呈した竪穴住居である。南側の長辺の中央に深さ20cm足らずの不定形を呈した土坑をもち、土坑の周囲を浅い直線の溝で3方向から囲んでいる。主柱穴は長軸方向に並んだ2本と考えられる。主柱穴の中間には深さ6cmほどの浅い土坑が設けられており、火を使った痕跡が見られる。北辺と西辺には壁面から0.7~1.0mの距離で平行した溝が「L」字形に設けられており、間仕切り溝、或いは屋内高床部を区切る溝であろう。但し、この小溝の両側では外側が2cmほど高いだけである。出土遺物は豊富であるが、斜面上方のSH2から流れ込んだと考えられる弥生時代中期のものが多く含まれる。周壁溝や屋内溝、床面上からも土器は出土しているが、西側の壁溝と屋内溝間から多く出土している。屋内溝に囲まれた床面には台石と思われる塊石が、ひとつは北東隅から、ひとつは南辺土坑前面から2基出土している。

### SH2 (図版19)

SH2はSH1の北西に接して検出された直径約5mの平面形が円形を呈する竪穴住居である。削平のために竪穴の掘り込みはなく、周壁溝、主柱穴、中央土坑が検出できた。斜面下方の周壁溝は失われており、本来は盛土整地をおこなっていたものが流されたと考えられる。主柱穴は5本柱になるものと考えられ、中央には深さ約20cmの楕円形の土坑と浅い溝状の土坑が並んでいる。所謂「1〇型中央土坑」と呼ばれるものであろう。削平により焼土等は観察できなかった。SH2から出土した遺物は図化できなかったが、斜面下方のSH1から出土した土器から弥生時代中期中頃の時期に該当する。

## 2. 掘立柱建物

### SB1 (図版20)

SB1は南地区北西端で検出された。一辺が約30cmの隅丸方形の平面形を呈した柱穴が5基、直線的に並び、西側に展開するものと思われるが、直交方向の柱穴は1基のみ検出された。柵列の可能性もあるが、削平されていることを考慮して掘立柱建物とした。柱間は桁行2.2~2.6m、梁間2.0mを測る。SH2を切って掘削されている。柱穴内からは弥生土器片以外は出土していないが、包含層や流路などから奈良時代の土師器・須恵器が出土していることから、この掘立柱建物をその時期に当てはめることができよう。

### SB2 (図版20)

SB2はSH1の東側でSH1を切って検出された。2間×3間以上の規模をもち、柱間は2.1~2.8mを測り、SB1と異なり、柱穴の平面形は円形を呈している。柱穴内からは時期の判明できるものは出土していないが、建物の内側のP21からはサスカイト製石織の他、土師器小皿片が出土しており、この掘

立柱建物や小柱穴などは中世に属する可能性がある。

### 3. 溝

#### SD1

南地区の微高地が緩やかに南へと下る南半部に東西方向に横切る幅約2.5m、深さ0.5mの東流する溝で、自然流路の可能性もあるが、微高地を形成する黄灰色極細砂の地山面を切り込んでいることから、溝とした。礫を多く含むが、ラミネーションをもって粗砂から粘土がレンズ状に堆積している。出土した遺物のうち、図化できたのは弥生土器のみであるが、上層には須恵器が含まれている。

#### SD2

東流するSD1の東端で直交し、流路と合流する部分をSD2としたが、東側は調査区外になっており、溝であるかは判別できない。盛土護岸の前面にあたり、護岸から約30cmの深さで下がり、砂によって埋没していた。底は比較的平坦で礫も少ない。流路やSD1などの埋土とは異なり、溝ではなく溜池の一部となるのかもしれない。弥生土器を図化したが、上層からは須恵器が出土している。

### 4. 流路

南地区の南半を南西から北東方向に走る流路を検出した。流路内はラミネーションをもった粗砂から巨礫混じりのシルトの堆積であり、西から東へと流れていたことがわかる。湧水があるため、川底までは掘削していないが、遺物の出土が見られる砂層までを除去した。この流路は南側を流れる平田川本流の一部と考えられる。流路の北側の河川攻撃斜面側に多くの礫が堆積しており、その部分のラミネーションは顯著ではなく、人為的に盛られたものと思われる。流路内からは弥生土器、土師器、須恵器などが出土した。

### 5. 盛土護岸

流路と溝に囲まれた突出部先端に大小の塊石が集積されており、その背後に盛土をおこなっている。調査当初、塊石も北地区の遺構検出面で露出しているものや、南側の河川内の転石と変わらないことから、谷地形によく見られる自然堆積の一部と捉えていた。そのため実測をおこなわず取り外したが、この突出部上に盛土上の整地をおこなっていることが判明したことから、何らかの人工的な施設の可能性が考慮された。本来、南西から北東へ流れる流路の北岸に礫を集積した後、盛土をおこなっており、その東斜面に塊石を並べている。最高でも2段程度に積み上げ、南北方向に塊石を並べ、その西側に礫を詰め込んでいる。盛土の下層には礫が多く含まれるが、敷き並べられた状況とは判断できなかった。礫の前面、東側はSD2となり、礫の包含は少なくなる。盛土内からは弥生土器の他に完形に近い須恵器杯などの奈良時代の土器が出土しており、盛土は奈良時代以降におこなわれたものと思われる。また盛土上面で検出された柱穴・小溝からも奈良時代以降の遺物は出土していない。

## 第3節 遺 物

### 南地区出土の土器

#### 1. 壘穴住居出土の土器（図版21）

101～117はSH1から出土しているが、中央土坑の東側の柱穴から出土した110・111や、南辺の土坑

から出土した112も含めて110～117は弥生土器である。おそらくSH2から流入したものであろう。

101は土師器壺口縁部で、大きく外反し、丸く収める口縁端部をもつ。摩滅が著しく調整は不明である。胎土中には砂粒を多く含む。

102は土師器直口壺である。肩部から屈曲して短くやや開き気味に直立する口縁部へと続く。調整は不明であるが、内面の屈曲部下方にはヘラケズリが観察できる。

103は小型の甕で復元口径約11cmを測る。屈曲して外傾する口縁部へ続く。口縁端部は丸く収めている。胴部外面には横方向の平行タタキを残してナデ調整を施し、胴部内面は頸部直下まで横方向のヘラケズリを施している。

104も甕であるが、緩やかに外反させて広がる口縁部へと続く。端部を丸く収めた口縁部はヨコナデで仕上げ、胴部外面には縦方向のハケメが残る。胴部内面は頸部の下方まで縦方向のヘラケズリを施す。

109の底部と近接して出土したが、接合できなかった。上げ底の底部で内面にはヘラケズリが施されている。

105は屈曲して短く聞く口縁部をもつ大型の甕或いは鉢である。胴部外面には縦方向のハケの後、斜め方向のハケを施す。内面は摩滅により調整は不明である。

106は住居址の南西部で出土した高杯である。口縁・脚ともに端部を失っている。杯部は水平に開いた後、斜めに直線的に聞く。脚部は緩やかに聞く脚柱部から屈曲して聞く脚端部に至る。摩滅が著しく調整は不明である。

107・108は高杯杯部である。107は106と同様水平に開いた後、斜めに直線的に聞く口縁部をもち、外面は縦方向のハケの後、横方向のヘラミガキを施し、端部はヨコナデで仕上げる。内面はハケの後、ヨコナデで仕上げる。

108は内湾する杯部で、外面は縦方向のハケメを残してナデによって仕上げる。

110は平底の底部で、外面には縦方向のハケメが残る。

111は直口壺口縁部で、頸部から内湾気味に立ち上がる口縁部の上端はヨコナデによって面を作り出す。頸部には刻目凸帯をめぐらせていた痕跡が残るが、摩滅が著しい。

112は高杯脚部である。裾部を外方に突出させ、外側に面を作る。外面にはヘラミガキが残る。

113・114は広口壺口縁部である。大きく外反させた端部を上下に拡張して面を作る。ともに摩滅のため調整等は不明である。

115は直口壺口縁部である。やや聞き気味に直線的に立ち上がる口縁の外面はヨコナデによって調整され、4条の凹線を巡らせる。

116の底部は底径約8cmの平底で、外面には縦方向のハケメが残る。壺の底部であろう。

117は甕上半部で、屈曲して短く外反する口縁部をもつ。ヨコナデによって調整された口縁端部は上方へ拡張して端面を作る。摩滅が著しいが、内面にはヘラケズリ或いはイタナデが観察される。

## 2. 土坑・柱穴出土土器（図版21）

118・119はSK1から出土した。118は大きく外反して聞く広口壺口縁部で、端部を上下に拡張して面を作る。外面はハケの後、ヘラミガキを施し、ヨコナデで仕上げる。119は平底の底部である。

120～124はSK6から出土した弥生土器である。120は甕の口縁部で、短く外反して上下に拡張する端部をもつ。

121は高杯部で、緩やかに内湾し端部を外方へ拡張して面を作り出す。

122は高杯脚部で、裾部を外方に突出させ、外側に面を作る。内面には横方向のヘラケズリが残る。

123・124は底部である。两者とも外面に縦方向のヘラミガキを施す。

125はSK4出土の土師器高杯の杯部である。外方へ開いた後、屈曲して外反する口縁部へと続く。摩滅が著しいが、口縁部外面には横方向のヘラミガキが施されている。

126はP23出土の土師器小型精製高杯或いは台付鉢である。短く外方へ開く脚部から直接体部へと続いている。

### 3. 溝・流路出土土器（図版21・22）

127から131はSD1から出土している弥生土器である。127は広口壺口縁部で、大きく湾曲して開く口縁の端部は下方へ下垂し、上方にも拡張して摘み上げる。広い端面には7条の凹線を巡らせ、一部に6本以上の棒状浮紋を貼り付ける。

128も広口壺であり、大きく湾曲して開く口縁端部は上下にわずかに拡張している。摩滅が著しいが、端面は無紋か1～2条の凹線を施しているようである。

129は指頭圧痕による刻み目を施した貼り付け突帶を巡らす頭部である。

130は高杯脚・杯の接合部で、杯底部は円盤充填により埋めている。外面は縦方向のヘラミガキを施した後、脚部に5条のヘラ描き沈線を巡らせている。

131は高杯脚部で、内面には横方向のヘラケズリを施す。

132はSD2出土の弥生土器甕口縁部である。屈曲して短く開く口縁端部を拡張して面を作り、端面には2条の凹線紋を施している。外面の一部に縦方向のハケメが残る。

133はSD1・2の合流部から出土した弥生土器広口壺口縁部である。大きく湾曲して開く口縁部の下端を下垂させ、上方にも拡張している。口縁上面には1条の貼り付け突帶を巡らせる。口縁端面には6条の凹線紋を巡らせ、一部に7本以上の棒状浮紋を貼り付ける。

134～139は流路出土の土器である。134は弥生土器の回転台形土器である。脚部を失うが、平滑な天井部の一部が残る。内面には指頭圧痕が見える。

135は小型の土師器壺で、緩やかに湾曲する口縁部をもつ。外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケの後、下半に縦方向のハケを施す。

136～138は須恵器杯Aで、底部はヘラ切りのままで不調整。136は口縁端部をわずかに外反させている。1/2の残存率で口径12.0cm、器高3.7cm、底径7.4cmを測る。

137は1/4の残存率で、口径12.8cm、器高4.1cm、底径8.8cmを測る。

138は口縁端部を外反させている。底部からの立ち上がりが丸く古相を示す。2/3の残存率で、口径11.7cm、器高4.9cm、底径7.2cmを測る。

139は壺形の須恵器であるが、口縁部を含む上半部を失っている。小型の平瓶と考えるが、底部中央に自然釉が掛かっている。底部は杯Aと同様ヘラ切りのままで、低い胴部から強く張った肩部に続く。

140～152は流路北岸の盛土護岸から出土した。140～145は弥生土器である。140は広口壺口縁部で、大きく外反する口縁端部を下垂させ、上方にも突出させる。端面には5条の凹線紋を施し、現存で3本の棒状浮紋を貼り付ける。

141は無頸壺口縁部で、内傾する端部を折り返して上方に面を作る。口縁部直下に焼成前の穿孔を施す。ナデによって仕上げている。

142は高杯脚部で、外方に拡張した脚部をもつ。

143は甕口縁部で、屈曲して短く開く口縁端部は上方に拡張して端面を作り、1条の凹線を施す。内外面ともハケ調整を残す。

144・145は底部である。145の外面は縦方向のヘラミガキで仕上げる。

146～151は杯Aで、底部はヘラ切りのまま不調整である。歪のあるものが多い。146は底部が小さく、斜め上方に立ち上がり、古相を示す。1/2の残存率で、口径11.4cm、器高4.0cm、底径6.8cmを測る。

147は1/4の残存率で、口径11.8cm、器高3.8cm、底径8.6cmを測る。

148は底部内面に2方向の仕上げナデを施している。2/3の残存率で、口径10.9cm、器高4.0cm、底径8.3cmを測る。

152は杯Bで、部分的に焼成の悪いものである。1/2の残存率で、口径14.1cm、器高4.7cm、底径10.7cmを測る。

#### 4. 包含層出土土器（図版22）

153～158は南地区の包含層等出土のものである。153・154は土師器の大型甕で、153は緩やかに外反する口縁部をもつ。外面は縦方向のハケ、口縁上面は横方向のハケを施す。

154は短く水平気味に開く口縁をもち、外面は縦方向のハケ、口縁上面は横方向のハケを施す。155・156は須恵器蓋で、笠形の形態で、口縁端部を下方に摘み出すものである。天井部との境に稜をもつ。156の天井部は一部にヘラケズリが見られる。

157は須恵器の小型の杯Bである。

158は須恵器の碗で、糸切り底の低い平高台から内湾する体部へと続く。外面には1条の沈線が巡る。底部内面は一段低く落ち込む。

#### 5. 北地区出土土器（図版22）

159から169は北地区の包含層等から出土した。159は弥生土器高杯の杯部である。水平に開く口縁端部はわずかに下方に拡張される。上面に突帶を貼り付ける。

160は土師器の鉄かぶと形鍋で、最大径が口縁部で鉢形に開く。外面には平行タタキが残り、肥厚した端部はナデによって仕上げる。

161は須恵器杯Aで、ヘラ切りの底部から稜をもって立ち上がる。

162・163は須恵器杯Bで、貼り付け高台からやや外方に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。底部内面には仕上げナデを施す。

164は壺底部と考えられ、底面が凹線状にくぼむ貼り付け高台をもつ。

165は須恵器皿で、ヘラ切りされた底部から短く外湾する口縁部がつく。

166は須恵器蓋で、水平な天井部から緩やかに開いた口縁部へと続き、端部は下方へ突出する。天井部はナデ調整を施す。

167は須恵器壺口縁部で、外反した口縁端部を上方にわずかに拡張して面を作り、凹線状にくぼませる。

168は唐津燒椀底部で、一部に糸切り痕の残る削り出し高台の外面は露胎である。灰白色の釉薬の掛かった内面には砂目が見られる。

169は須恵質の平瓦片で、凸面には斜格子タタキ、凹面には布目が残る。側面は凹面側の面取りを施している。

#### 6. 石器（図版23）

出土した石器の器種を見ると石鏃、楔形石器、柱状片刃石器、すり石、砥石がある。以下器種ごとに詳細を述べる。

**石鎌**（S 101～S 106）すべてサスカイト製の打製石鎌である。S 101は平基式石鎌で基部は若干くぼませてある。先端は欠損している。現存長25.5mm、最大幅20.2mm、厚さ4.0mm、重さ1.9gを測る。柱穴埋土中から出土した。S 102は円基式石鎌である。現存長23.2mm、最大幅15.8mm、厚さ6.0mm、重さ1.7gを測る。包含層から出土した。S 103は有茎式石鎌である。茎部の作り出しは左右対称でなく、片側は明確な抉り込みがない。現存長32.3mm、最大幅15.4mm、厚さ5.5mm、重さ2.6gを測る。包含層から出土した。S 104は有茎式石鎌である。茎部、切っ先ともに若干欠損している。現存長24.6mm、最大幅16.8mm、厚さ4.3mm、重さ1.5gを測る。包含層中からの出土である。S 105は尖基式石鎌である。現存長44.0mm、最大幅13.6mm、厚さ4.0mm、重さ2.2gを測る。SK1埋土中からの出土である。S 106は有茎式石鎌である。茎部端をわずかに欠いている。現存長40.0mm、最大幅18.1mm、厚さ6.0mm、重さ3.5gを測る。包含層中からの出土である。

**楔形石器**（S 107～S 110）すべてサスカイトである。S 107、S 109、S 110は平面が四辺形をなし、向かい合う2辺がそれぞれ階段状剥離と剪断面の組合せによりなる。S 108は平面が三角形をなし、階段状剥離を有する1辺と剪断面2辺より構成される。法量はS 107で長さ25.2mm、幅37.0mm、厚さ8.5mm、重さ7.5g、S 108で長さ13.3mm、幅45.0mm、厚さ5.3mm、重さ2.6g、S 109で長さ25.3mm、幅31.4mm、厚さ6.0mm、重さ4.6g、S 110で長さ26.0mm、幅50.0mm、厚さ8.2mm、重さ13.8gを測る。出土位置は、S 107が包含層から、S 108が流路から、S 109・110はSH1の埋土中からである。

**柱状片刃石斧**（S 111）いわゆる縁泥片岩系の石材を用いており、基部側を半損している。旧河道から出土した。現存長は113.0mm、幅47.3mm、厚さ28.7mm、重さ257.6gを測る。刃部には若干の研ぎなしが認められる。

**すり石**（S 112）器表は風化のため荒れしており、残存箇所は多くない。両端には敲打による平坦面が形成されている。現存長は102.5mm、幅92.0mm、厚さ50.0mm、重さ777.4gを測る。

**砥石**（S 113）平面は不整な四辺形を呈するが、3辺は欠損している。砥面は両面にみられる。現存長は93.5mm、幅82.7mm、厚さ14.5mm、重さ146.4gを測る。

この他にサスカイトの剥片などが南地区を中心に92点出土しており、一部を写真掲載した。（写真図版40）ほとんどが白黒の縞状を呈した石質で、S 120とS 123の剥片2点を産地同定分析資料とした。S 120は一部に自然面を有しており、重量17.2gを測る。S 118も一部に自然面を有する。最大のものはS 117で、約8.3×5.9×2.3cmで135.4gである。

また、竪穴住居SH1からは床面に座った状態で2個体の台石が検出された。（写真図版41）両方とも質は異なるものの花崗岩質の角の取れた自然礫を用いているが、顕著な使用痕は認められない。S 128は23.0×28.0×11.2cm、S 129は一部欠けているが、19.2×30.0×5.7cmを測る。

## 第4節 小 結

長尾三ノ谷遺跡は、東方向にのみ開けた谷の中に立地しており、眺望は悪い。調査地点は、この谷の中では幅250mと比較的広くなる箇所である。この谷は調査地点の西上流側で二股に分岐するが、両方の谷とも奥行きが深い。このような谷の中に断続的ではあるが、小規模な集落が営まれていることがわかった。

出土遺物から時代をおって見ていく。弥生時代中期、畿内編年でⅦ期併行段階の土器が石器を伴って出土している。該当時期の遺構には、円形の竪穴住居SH2などがあり、流路内からも同時期の遺物

が出土していることから、上流側に集落の範囲が広がっていることが推測できる。サスカイト製の石器や石核・チップが多く出土しており、集落内で一部の石器を製作していたことがわかる。

同じ揖保川流域右岸の沖積地に立地する清水遺跡では、中期Ⅳ初頭から中期Ⅴにかけて集落が営まれるが、サスカイト製石器はごく少ない。長尾三ノ谷遺跡と同様に、谷の中の眺望の利かない立地である中期Ⅴの小犬丸大谷遺跡でもサスカイトの保有量は貧弱である。この各集落におけるサスカイトの保有状況の差は、あまりにも極端であり、中期から後期への断絶を物語っているとともに、その前段階での集落の拡散に伴う小規模な生産の分業体制に一要因が求められるのではないかろうか。

古墳時代前期の終わり頃にも方形の堅穴住居SH2や上坑SK8などが営まれているが、遺物量は貧弱であり、大きな集落があったわけではなかろう。

8世紀から9世紀にかけての土師器・須恵器が出土しており、遺物量は比較的豊富でありながら、該当時期の遺構は不明瞭である。掘立柱建物SB1や盛土護岸などが該当するのではないかろうか。やや歪んだ須恵器が出土していることから、窯に関係した集落の可能性もある。

11世紀代、15世紀代、17世紀代の遺物も若干ながら出土しており、掘立柱建物SB2や小柱穴などはその時期のものではないかと思われる。

南北朝期、赤松氏の居城とされる光明山城が長尾三ノ谷遺跡背後の光明山山頂から南東へ伸びる緩やかな尾根上に存在する。長尾三ノ谷遺跡のある谷を遡上すれば、この山城へと取り付くことができ、搦め手或いは大手の登り口としてその時期に利用された可能性は高いが、該当時期の顯著な遺構・遺物は見られなかった。東方の林田川左岸での発掘調査によっても確認された中世山陽道（筑紫大道）は極めて直線的に作られた街道であり、その延長はこの長尾の谷へと向かっている。

流路の一部に石や土を積み上げている盛土護岸は、その所属時期が奈良時代以降としかわからないが、この谷の水利に関連した土木作業と思われる。現在の溜池である長池がいつの時期に構築されたものかは不明であるが、この溜池の現堤防の方向に一致した護岸は古い時期の溜池の護岸である可能性も捨てきれない。

左弁官下文建久八年四月三十日「壬生文書」には小犬丸保の領民が「往古計略を廻らせ、功力を尽し、更に池を構築し、作田に引き入れた。」とあり、12世紀の中頃までに地元の領民が溜池を修築したことを見える。この構築された池が今回検出された遺構であるとは限らないが、周辺の地形から見て同様の谷地形を利用した池であることは確かであろう。

稲作が日本に伝播した弥生時代当初は谷頭を利用した谷内水田が開発されたが、前期の中ごろには小規模な河川を堰き止めて水を導くことが盛んにおこなわれている。溜池が現れるのはいつの時期であろうか。太子町亀田遺跡では古墳時代後期に遡る井堰を構築した溜池状の遺構が見つかっているが、水路の一部を拡張した程度の規模である。三田市の川除・藤ノ木遺跡でも古墳時代後期の溜池が検出されており、また、南あわじ市の志知川・沖田南遺跡では古墳時代前期の溜池が検出されている。これらはいずれも沖積地におけるもので、河川から水路で導かれた水を一旦溜めて、稲のために水温を上昇させる機能をもつもので、常に水を溜める性格のものではなかろう。

伊丹市にある昆陽池は自然地形である谷を利用した池で、行基によって修築されたものとされている。このような行基や弘法大師による溜池修築の記事は文献によって知られ、また一部では発掘調査によって確かめられている。このような大規模灌漑施設の修築は公的なプロジェクトとしておこなわれたものや、宗教集団或いは渡来系技術集団などによるものと言われている。文献には載らないような、在地の領民によって修築された、谷川を堰き止めた程度の溜池は、かなり古くから存在していた可能性は高い

が、集落から離れた地点では遺跡として認知できていないのであろう。今後の調査例の増加を待ちたい。

【参考文献】

- 多賀茂治 1996 「玉津田中遺跡の堅穴住居について」  
『玉津田中遺跡』第6分冊 兵庫県教育委員会
- 兵庫県教育委員会 1998 『清水遺跡』兵庫県文化財調査報告第183冊
- 岸本道昭 1994 「断絶の中期と後期－西播磨弥生社会の理解のために－」  
『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要 3』財團法人大阪文化財協会
- 岸本道昭 1994 「弥生聚落の構造と地域史的位置」  
『養久山・前地遺跡』龍野市文化財調査報告15 龍野市教育委員会
- 西口和彦・森内秀造 1986 『相生市・緑ヶ丘窯址群』兵庫県教育委員会
- 西口和彦・森内秀造 1995 『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ』兵庫県教育委員会
- 池田征弘・服部寛 2002 『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅲ』兵庫県教育委員会
- 野村景右 2001 「相生・鹿野古窯跡群について」『ひょうご考古』第7号
- 兵庫県教育委員会 1991 『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県文化財調査報告第104冊
- 兵庫県教育委員会 1987 『対中遺跡』兵庫県文化財調査報告第80冊
- 兵庫県教育委員会 1986 『志知川・沖山南遺跡』兵庫県文化財調査報告第40冊

# 第5章 長尾三ノ谷遺跡出土サヌカイトの産地推定

竹原 弘展 (パレオ・ラボ)

## 1.はじめに

長尾三ノ谷遺跡は、南地区で弥生時代から奈良時代にかけての遺構・遺物が検出されている。長尾三ノ谷遺跡より出土したサヌカイト（弥生時代中期後半）について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、原産地を推定した。

## 2. 試料と方法

対象試料は長尾三ノ谷遺跡より出土したサヌカイトの剥片2点である（表1、図版）。各試料とも風化層に覆われていたため、試料の一部分をエアブラン用いて新鮮面の表出

をさせた後、超音波洗浄を行い、その新鮮面を測定箇所とした。

分析装置は、（株）セイコーインスツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2001Lを使用した。装置の仕様は、X線管はロジウムRhターゲット、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300sec、照射径10mm、電流自動設定（1-63μA、デッドタイムが20%未満になるよう自動的に設定）、電圧50kV、試料室内雰囲気真空中に設定した。

産地推定には、黒曜石産地推定法において用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法（例えば望月2004）を、分析対象をサヌカイトに置き換えて適用した。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)とルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps: counts per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) .Rb分率 = Rb強度 × 100 / (Rb強度 + Sr強度 + Y強度 + Zr強度)
- 2) .Sr分率 = Sr強度 × 100 / (Rb強度 + Sr強度 + Y強度 + Zr強度)
- 3) .Mn強度 × 100 / Fe強度
- 4) .log (Fe強度 / K強度)

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図（横軸Rb分率 - 縦軸Mn強度 × 100 / Fe強度の判別図と横軸Sr分率 - 縦軸log (Fe強度 / K強度) の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、原産地を推定するものである。

原石試料も、採取原石を割って新鮮な面を表出させた上で产地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に各原石採取地とそれぞれの試料点数を示す。

## 3. 分析結果

図1および図2に、サヌカイト原石の判別図と長尾三ノ谷遺跡出土試料2点をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするために、各判別群を縦円で取り囲んである。試料No.1は国分台・神谷神社の範囲に、試料No.2は金山の範囲に収まっている。このことから、これら試料は瀬戸地方産のサヌカイトである可能性が高く、少なくとも二上山系の春日山産ではないといえる。ただし、未知の产地の

表1 分析対象試料一覧

資料番号	地区	出土	備考	報告書番号
1	南(北半)	包含層	散高地上面検出	S 120
2	南	包含層	SH1上面検出	S 123

表2 原石採取地と試料数

原石採取地	試料数	
二上山	春日山	12
瀬戸	国分台自衛隊演習場横	12
瀬戸	国分台下みかん畠	12
瀬戸	神谷神社	12
瀬戸	雄山	6
瀬戸	雌山	6
瀬戸	金山	12
瀬戸	城山南側	6
瀬戸	城山北側	6
瀬戸	高産瀬神社	12

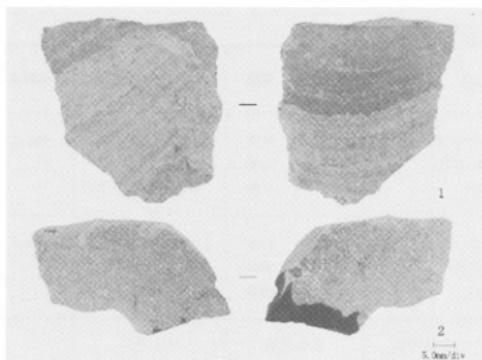
サスカイトである可能性は否定できない。

#### 4. 終わりに

長尾三ノ谷遺跡より出土したサスカイトについて、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、2点の遺物共に讃岐地方産と推定された。ただし、未知の産地である可能性もある。

#### 【引用文献・参考文献】

望月明彦 (2004) 用田大河内遺跡出土黒墨石の産地推定。かながわ考古学財団調査報告167 用田大河内遺跡、511-517、財団法人 かながわ考古学財団



図版 分析対象試料

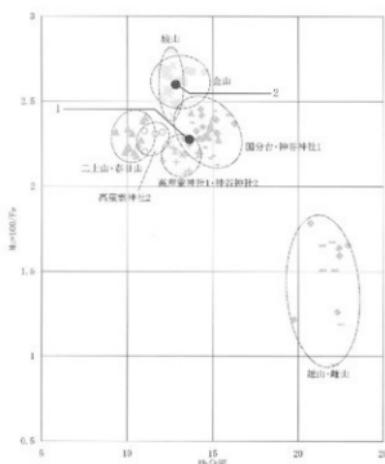


図1 サスカイト産地推定判別図(1)

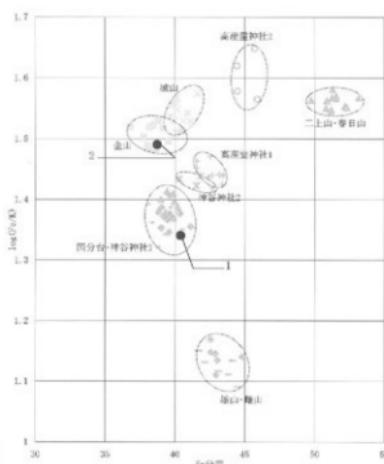


図2 サスカイト産地推定判別図(2)

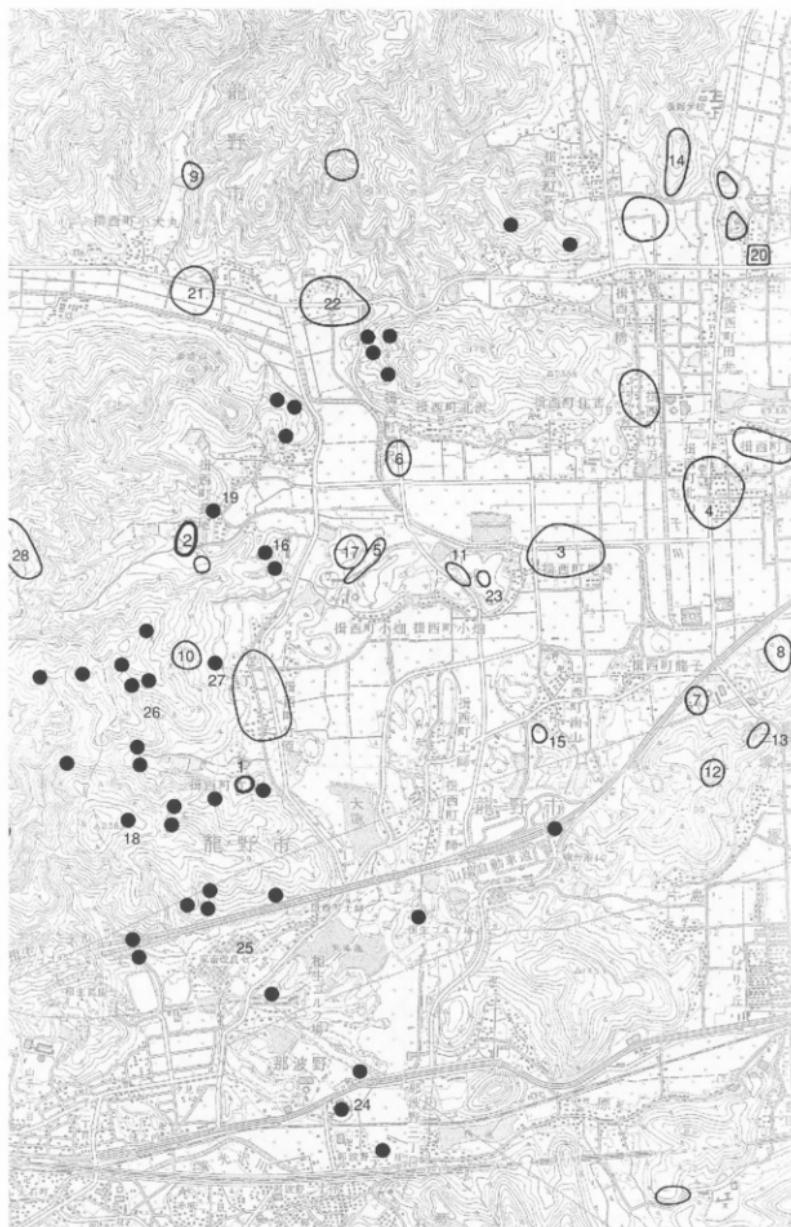
## 報告書抄録

ふりがな	たけはらはりまづかいせき・ながおみのたにいせき							
書名	竹原播磨塚遺跡・長尾三ノ谷遺跡							
副書名	山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	3							
シリーズ番号	兵庫県文化財調査報告 第293冊							
編著者名	別府洋二・高木芳史・竹原弘展							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011							
発行年月日	2006(平成18)年3月20日							
所取遺跡名	所在地	番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡調査					
竹原播磨塚 遺跡	兵庫県たつの 市揖西町竹原 字播磨塚	28229	970244	34度 50分 9秒	134度 29分 16秒	1997.08.06 ~ 1998.01.09	1,104m <sup>2</sup>	山陽自動車道 新宮I.C.建設事業
長尾三ノ谷 遺跡	兵庫県たつの 市揖西町長尾 字三ノ谷	28229	970245	34度 50分 49秒	134度 29分 6秒	1997.08.06 ~ 1998.01.09	1,110m <sup>2</sup>	山陽自動車道 新宮I.C.建設事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
竹原播磨塚 遺跡	集落 祭祀	平安・鎌倉・ 室町	塚・掘立柱建物・ 土坑	土笛器・須恵器・ 灰釉陶器・瓦		平安時代からの集落・中世 の積石塚		
長尾三ノ谷 遺跡	集落	弥生・古墳・ 奈良	堅穴住居・掘立 柱建物・護岸	弥生土器・土笛器 須恵器・石器		谷内の弥生から奈良時代の 集落		

---

# 図 版

---



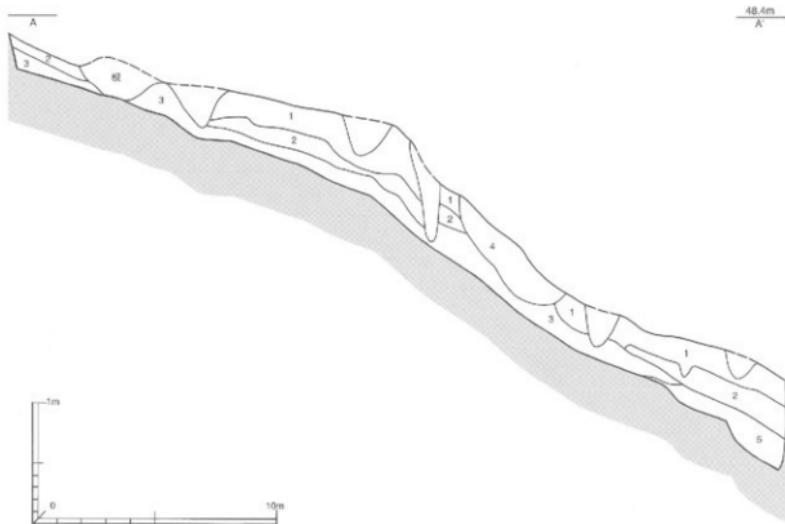
遺跡の位置 (1 : 25,000)



周辺の地形と調査範囲



遺構配置図



- |            |        |                            |
|------------|--------|----------------------------|
| 1. 2.SY6/4 | にぶい黄褐色 | シルト混じり細砂～中砂多く含む粗粒砂（しまりわるい） |
| 2. 10YR4/4 | 褐色     | 中砂多く含む粗粒砂                  |
| 3. 2.5Y7/4 | 浅黄褐色   | シルト混じり粗粒砂～中砂（しまりよい）        |
| 4. 2.5Y6/4 | にぶい黄褐色 | 米細砂 大塊多量                   |
| 5. 2.5Y5/3 | 黄褐色    | 米細砂 大塊多量                   |



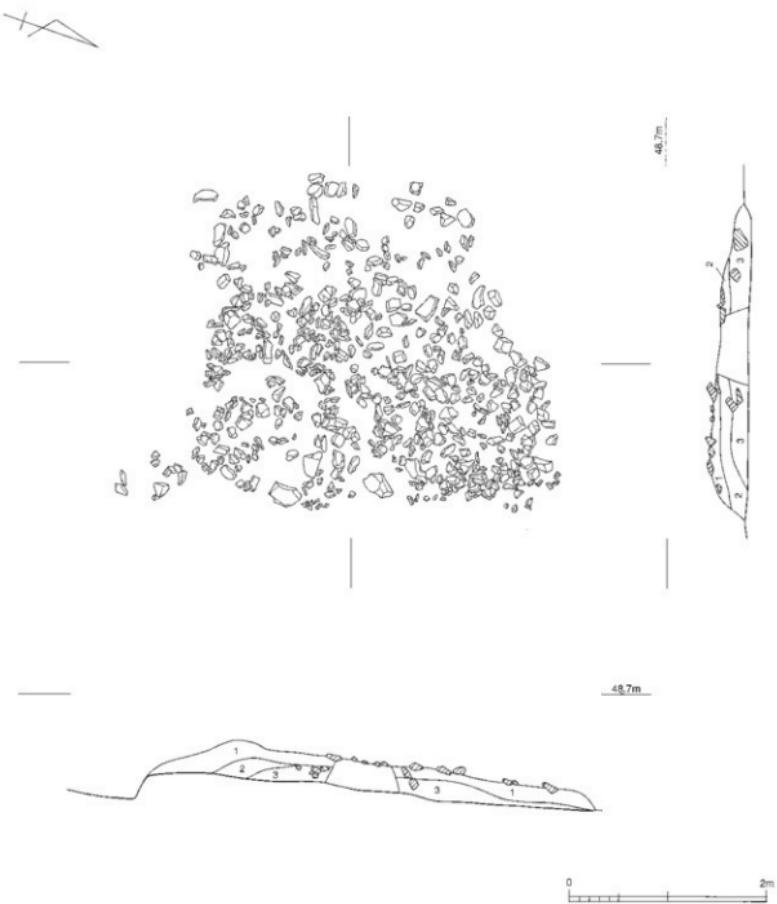
調査区南壁 基本土層図



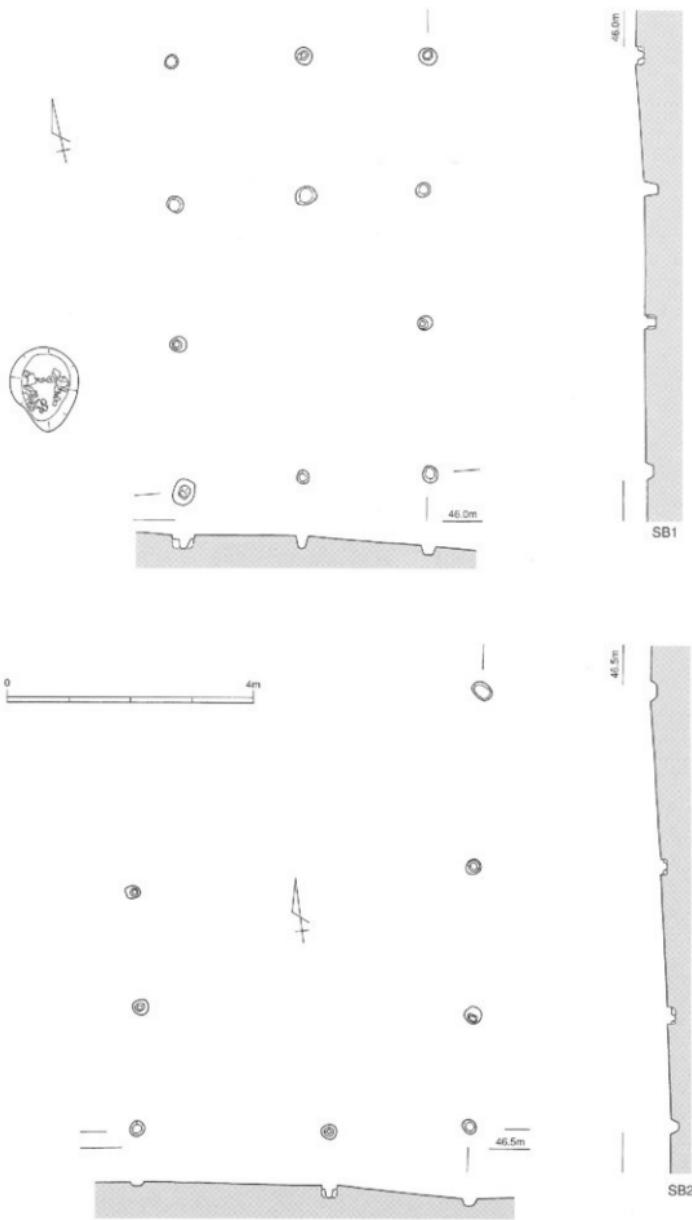
SX1



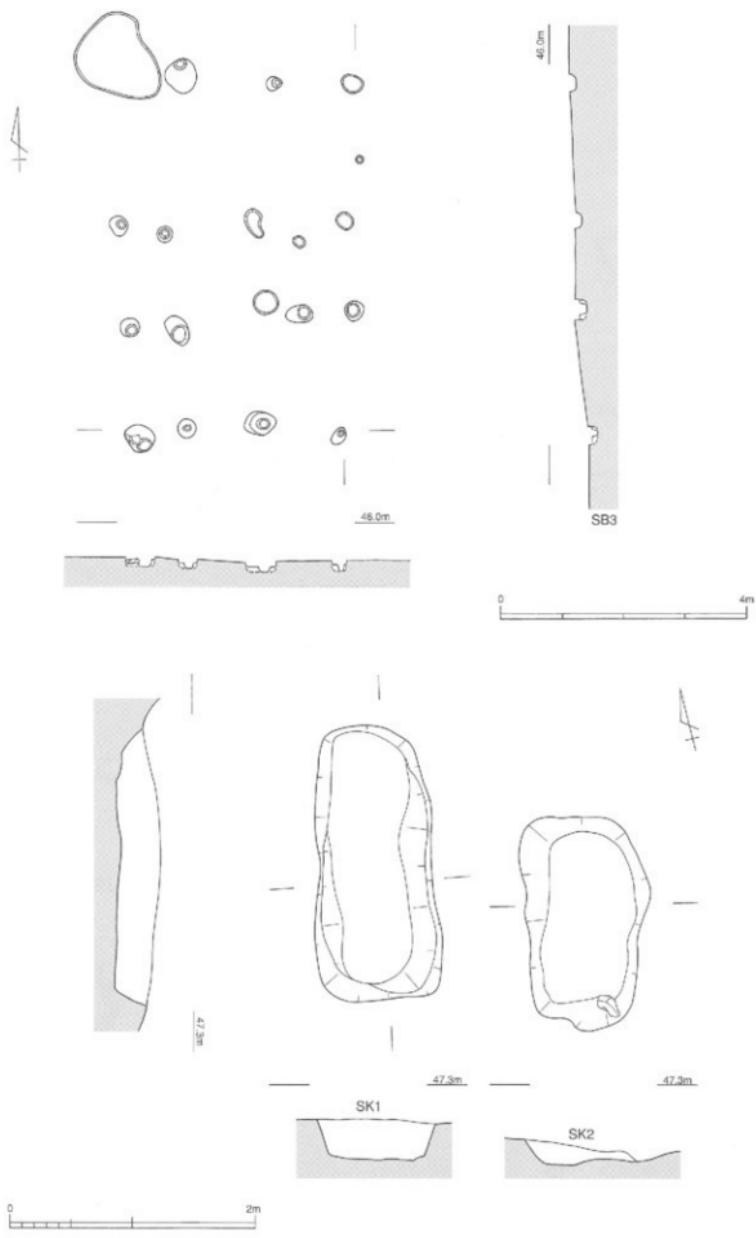
- 1. 2SY3/4 黄褐色 細砂～粗砂砂 大砂多量に含む
- 2. 2SY4/3 オリーブ褐色 中砂 砂塵少量混じる
- 3. 2SY3/4 黄褐色 シルト混じり細砂～粗砂砂 (ややしまりわい)
- 4. 2SY3/6 黄褐色 小砂～粗砂含むシルト混じり細砂～粗砂砂



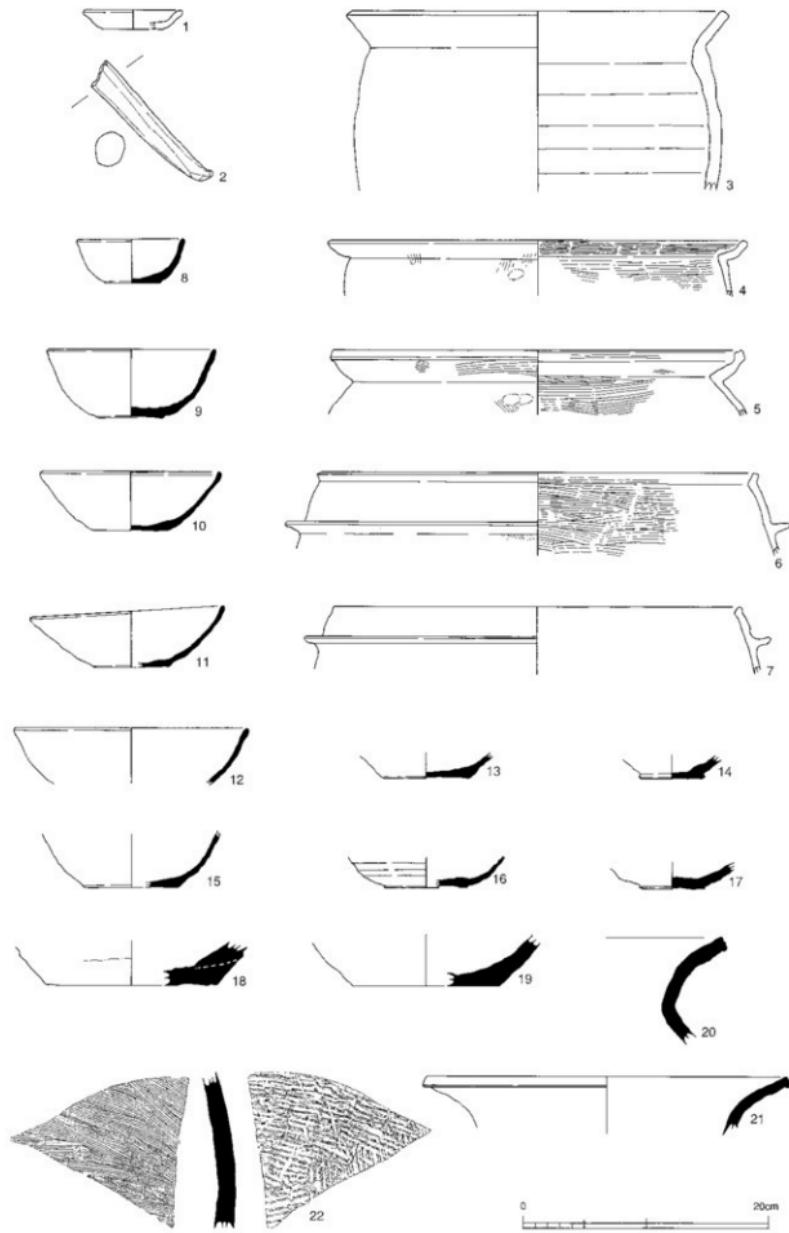
- |            |       |                          |
|------------|-------|--------------------------|
| 1. 2.5Y5/4 | 黄褐色   | 大謫多く含む細砂（しまりわるい）         |
| 2. 2.5Y5/4 | 黄褐色   | シルト混じり細砂                 |
| 3. 2.5Y6/4 | にぶい黄色 | 中謫～大謫多く含む中砂～粗砂混じり細砂（しまる） |



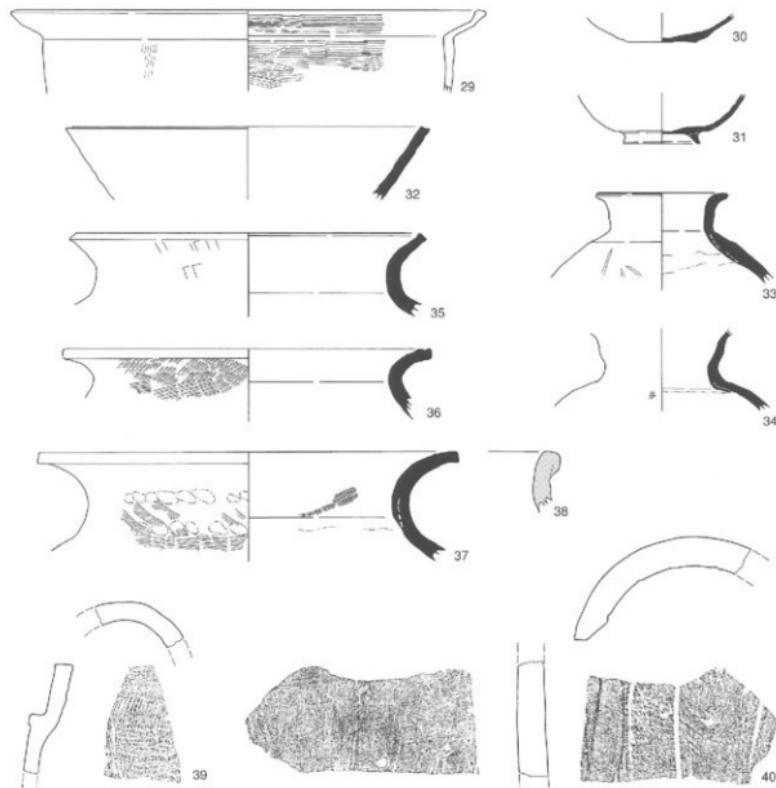
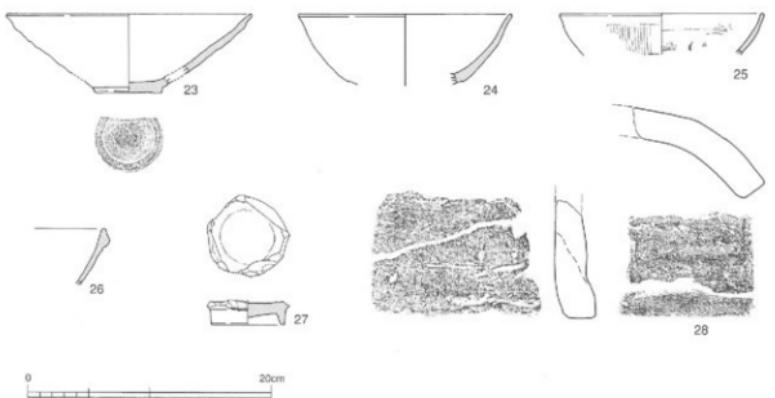
掘立柱建物（上：SB1，下：SB2）



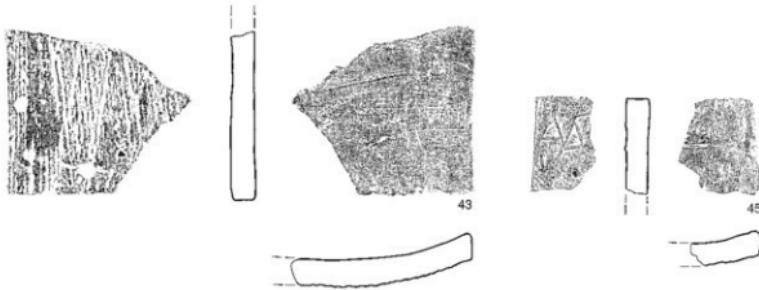
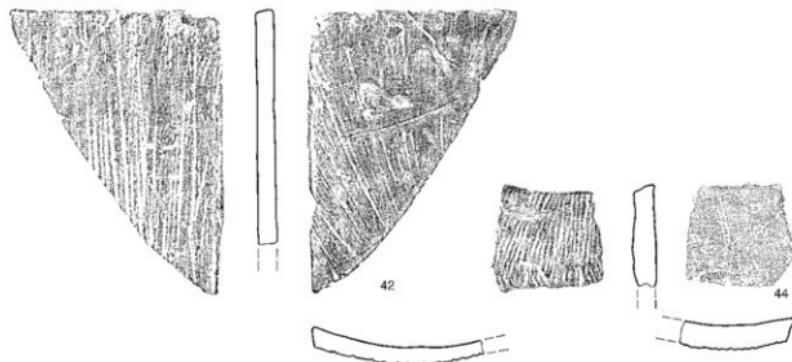
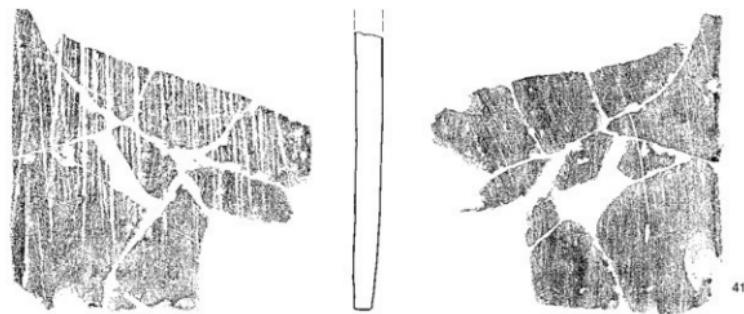
掘立柱建物 (SB3) 土坑 (SK1, SK2)



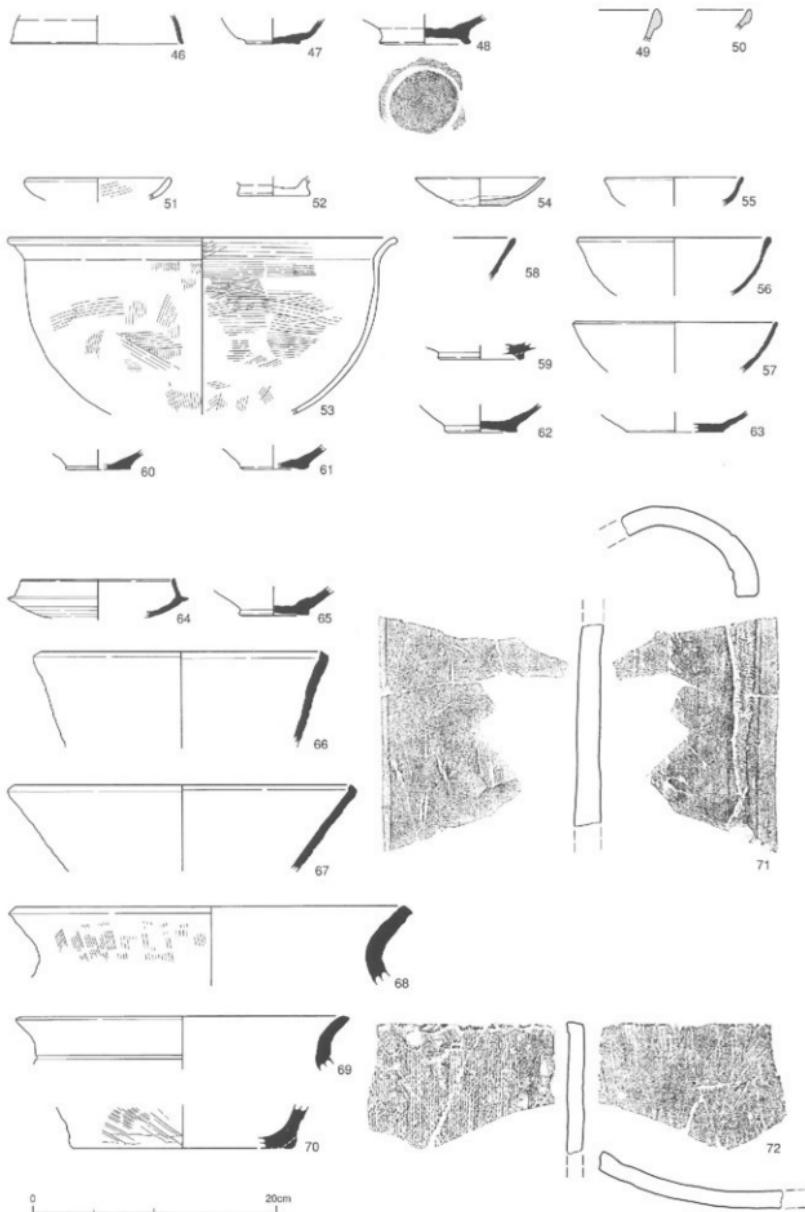
出土遺物 (1)



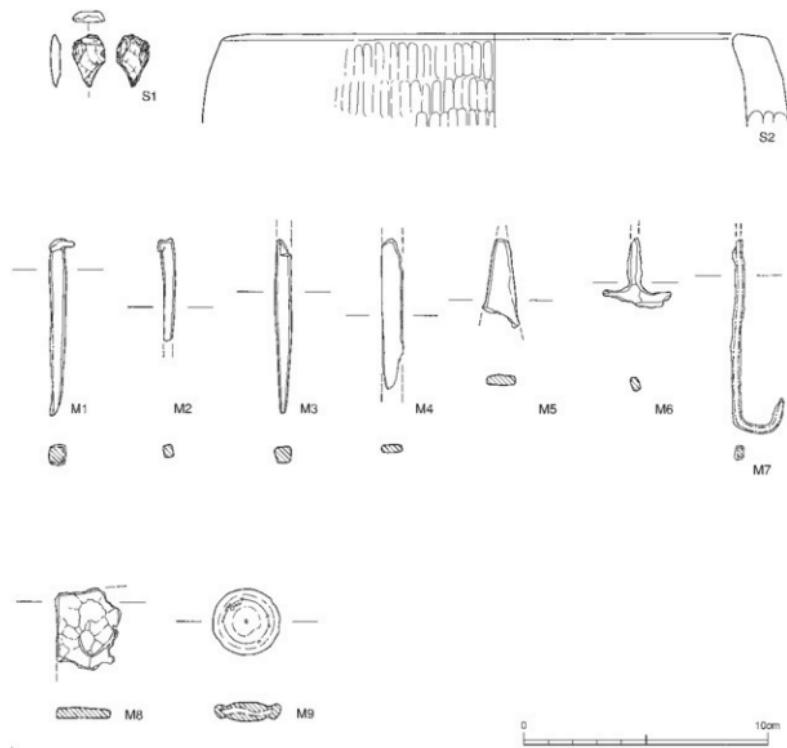
出土遺物 (2)



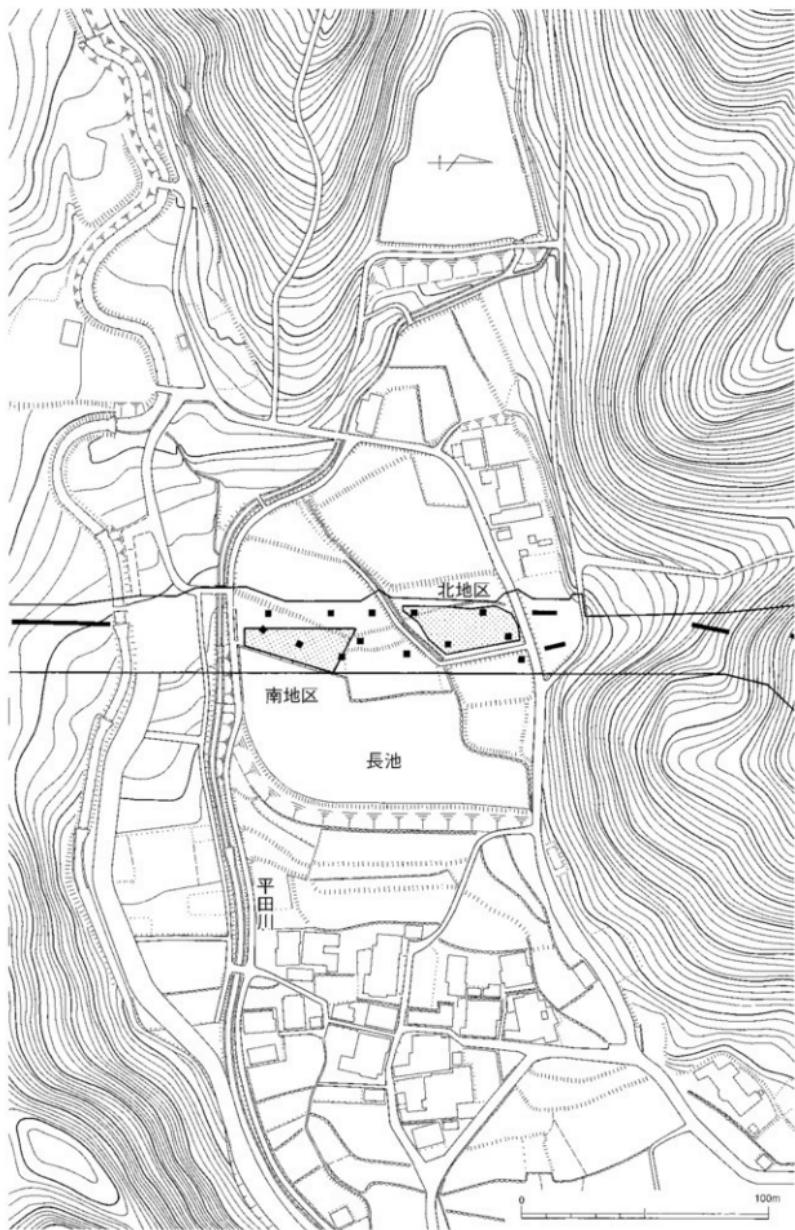
出土遺物 (3)



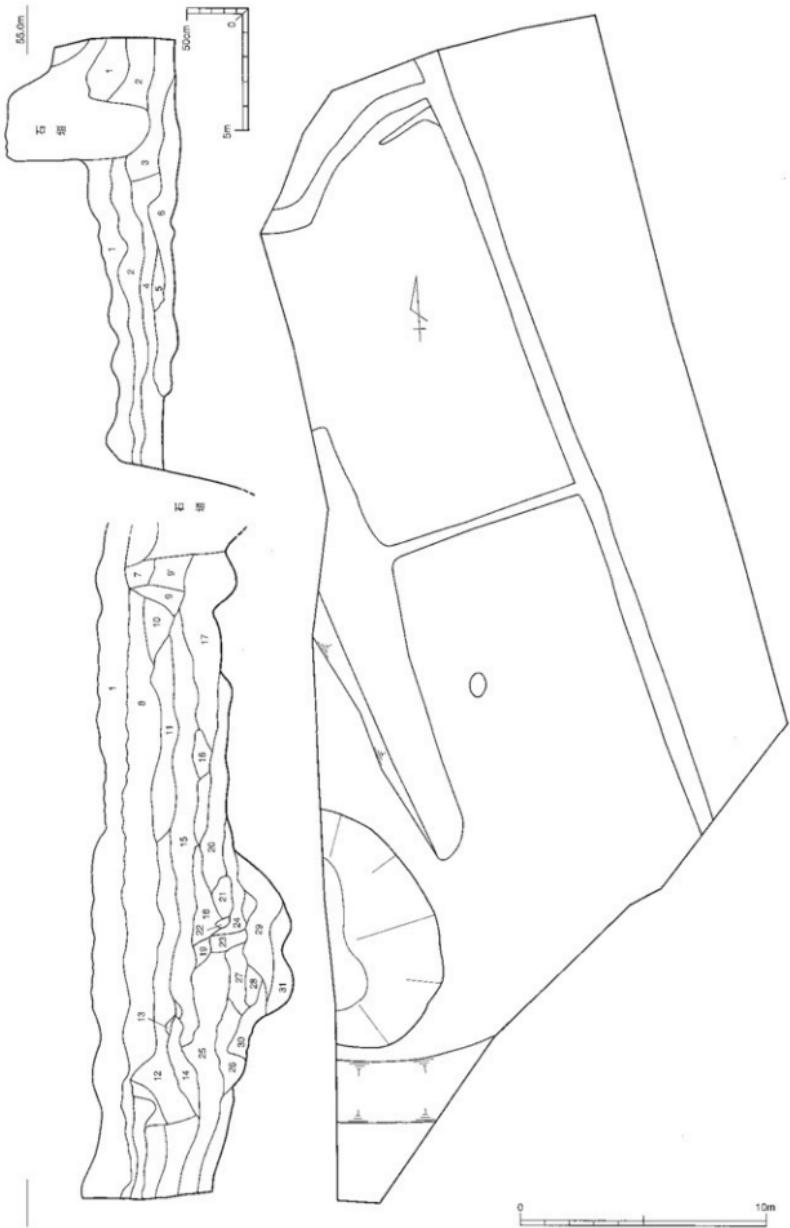
出土遺物 (4)



出土遺物（5）



周辺の地形と調査範囲



北地区 造構配置図と基本土層図

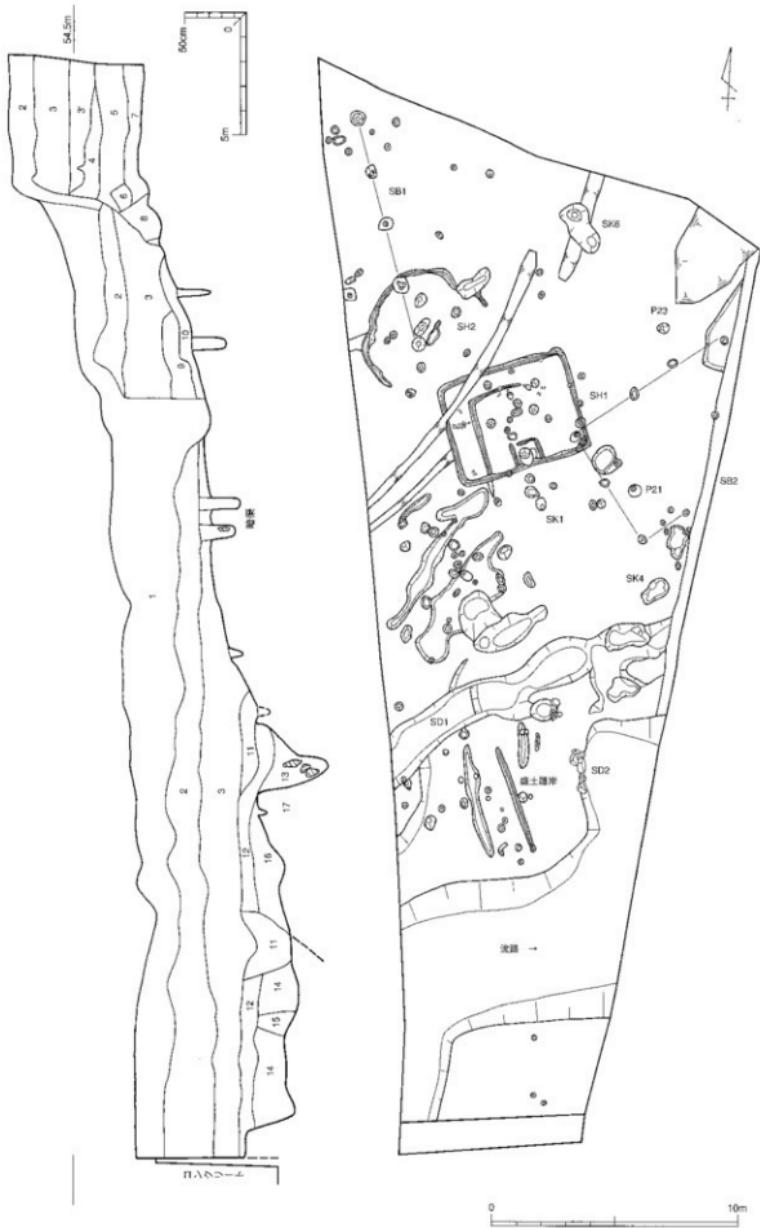
#### 図版16

- |             |        |                              |
|-------------|--------|------------------------------|
| 1. 10YR5/2  | 灰黄褐色   | 耕土                           |
| 2. 2.5Y5/2  | 暗灰黄色   | シルト混じり細砂～中砂（しまりわるい）          |
| 3. 10Y6/1   | 褐灰色    | シルト混じり細砂～中砂（しまり非常にわるい）       |
| 4. 2.5Y5/6  | 明赤褐色   | シルト混じり細砂～中砂                  |
| 5. 2.5Y6/2  | 灰黃色    | シルト混じり中砂～粗細砂                 |
| 6. 2.5Y4/2  | 暗灰黄色   | 粗砂～小礫わずかに含むシルト混じり細砂～粗細砂（包含層） |
| 7. 10YR4/3  | にぶい黄褐色 | 細砂～粗砂                        |
| 8. 2.5Y5/3  | 黄褐色    | 細砂～中砂含む極細砂（床上）               |
| 9. 2.5Y5/3  | 黄褐色    | 細砂～極細砂含む大礫                   |
| 10. 10YR6/3 | にぶい黄褐色 | 細砂～極細砂                       |
| 11. 2.5Y6/3 | にぶい黄色  | 極砂～粗砂（マンガン）                  |
| 12. 5Y6/4   | オリーブ黄色 | 細砂～粗砂（マンガン）                  |
| 13. 5Y6/4   | オリーブ黃色 | 粗砂～粗砂                        |
| 14. 2.5Y4/4 | オリーブ褐色 | 細砂～粗砂                        |
| 15. 2.5Y6/3 | にぶい黄色  | 中砂～粗砂                        |
| 16. 10YR5/4 | 黄褐色    | 中砂～極細砂                       |
| 17. 2.5Y5/3 | 黄褐色    | 中砂混じり粗砂                      |
| 18. 2.5Y5/3 | 黄褐色    | 極細砂 中砂多量                     |
| 19. 2.5Y5/4 | 黄褐色    | 中砂混じり粗砂                      |
| 20. 10YR4/4 | 褐色     | 極細砂～粗砂                       |
| 21. 10YR4/3 | 黄褐色    | 粗砂含む細砂～中砂                    |
| 22. 10YR4/2 | にぶい黄褐色 | 粗砂含む細砂                       |
| 23. 2.5Y4/4 | 黄褐色    | 極細砂～中砂                       |
| 24. 2.5Y4/2 | オリーブ褐色 | 極細砂混じり中砂～粗砂                  |
| 25. 10YR5/4 | にぶい黄褐色 | 細砂～粗砂                        |
| 26. 2.5Y4/3 | オリーブ褐色 | シルト混じり細砂～粗砂                  |
| 27. 2.5Y4/2 | 暗灰黄色   | 中砂～粗砂                        |
| 28. 10YR4/4 | 褐色     | 極細砂含む細砂～中砂                   |
| 29. 2.5Y3/2 | 黑褐色    | シルト混じり細砂～中砂                  |
| 30. 2.5Y3/2 | 黑褐色    | 細砂～中砂含むシルト                   |
| 31. 10YR3/4 | 暗褐色    | 中砂～極細砂                       |

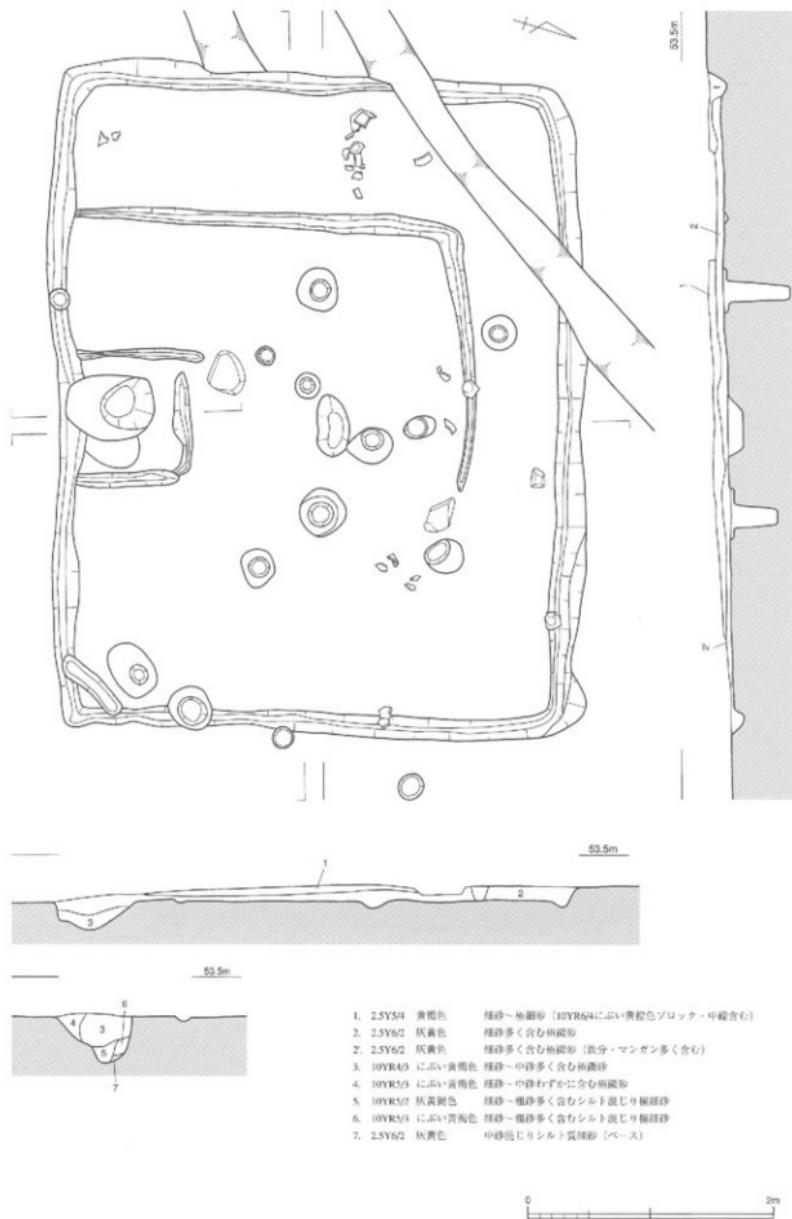
#### 図版17

- |             |        |                          |
|-------------|--------|--------------------------|
| 1. 虐土       |        |                          |
| 2. 耕土       |        |                          |
| 3. 10YR5/3  | にぶい黄褐色 | 細砂（盛土・IH耕土・未土）           |
| 4. 10YR4/4  | 褐色     | 細砂（包含層）                  |
| 5. 10YR4/2  | 灰黄褐色   | 細砂（大礫多し）                 |
| 6. 2.5Y5/3  | 黄褐色    | 細砂                       |
| 7. 2.5Y4/6  | オリーブ褐色 | 極細砂～粗砂                   |
| 8. 2.5Y4/6  | オリーブ褐色 | 極細砂～粗砂                   |
| 9. 2.5Y4/2  | 暗灰黄色   | 細砂                       |
| 10. 10YR5/8 | 黄褐色    | 極細砂質細砂                   |
| 11. 10YR4/1 | 褐色     | シルト質細砂                   |
| 12. 10YR3/1 | 黑褐色    | シルト質細砂                   |
| 13. 2.5Y3/1 | 黑褐色    | 中砂混じりシルト質細砂              |
| 14. 2.5Y2/1 | 黑色     | 中砂～巨礫混じりシルト（ラミネーション、旧河道） |
| 15. 5Y3/2   | 灰オリーブ色 | 粗砂～細砂（ラミネーション、旧河道）       |
| 16. 5Y4/1   | 灰色     | 中砂～巨礫混じりシルト質細砂           |
| 17. 2.5Y6/2 | 灰黄色    | 中砂混じりシルト質細砂（ベース）         |

図版 17  
長尾三ノ谷遺跡



南地区 遺構配置図と基本土層図

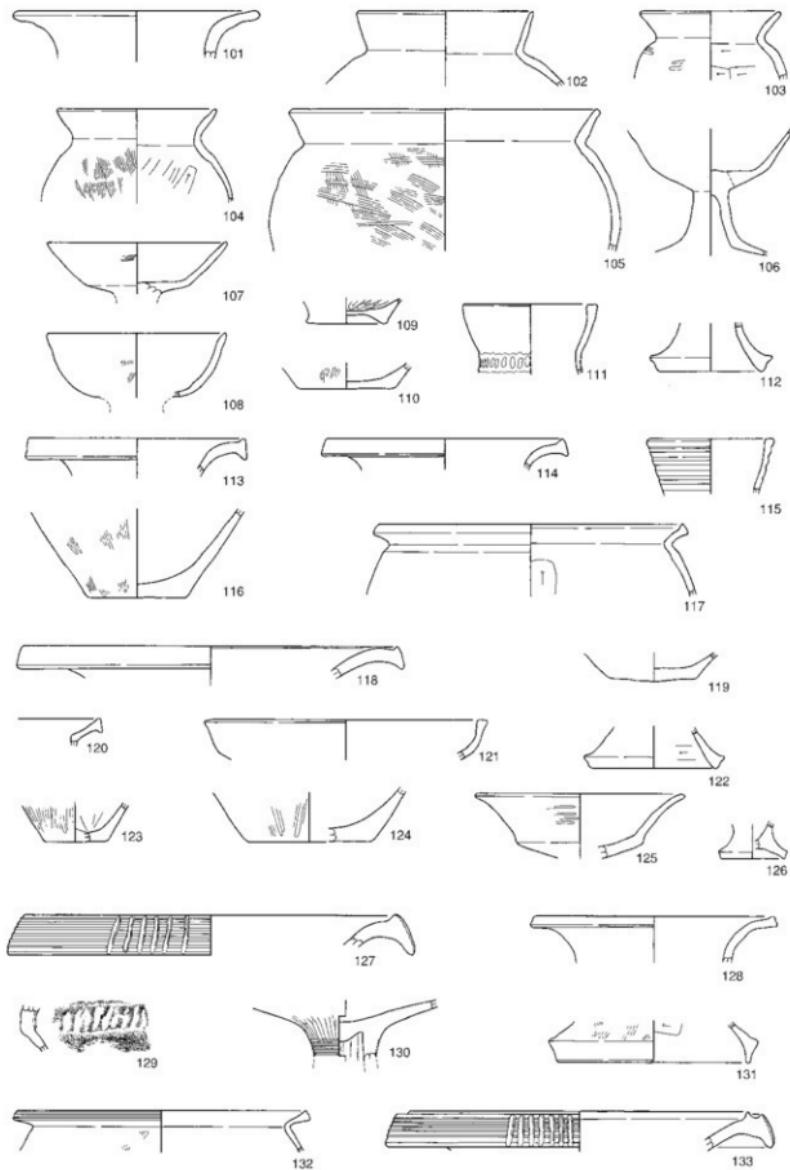


竪穴住居 SH1



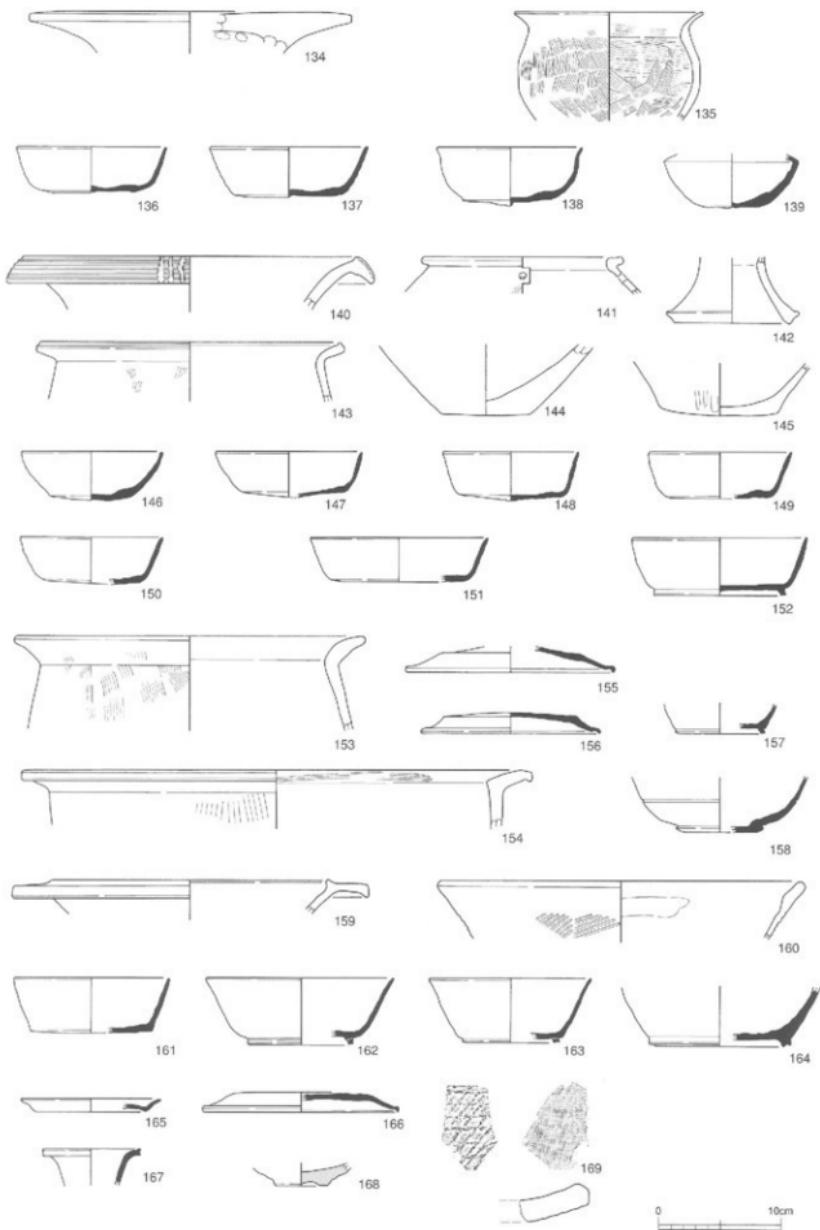


掘立柱建物（上：SB1、下：SB2）

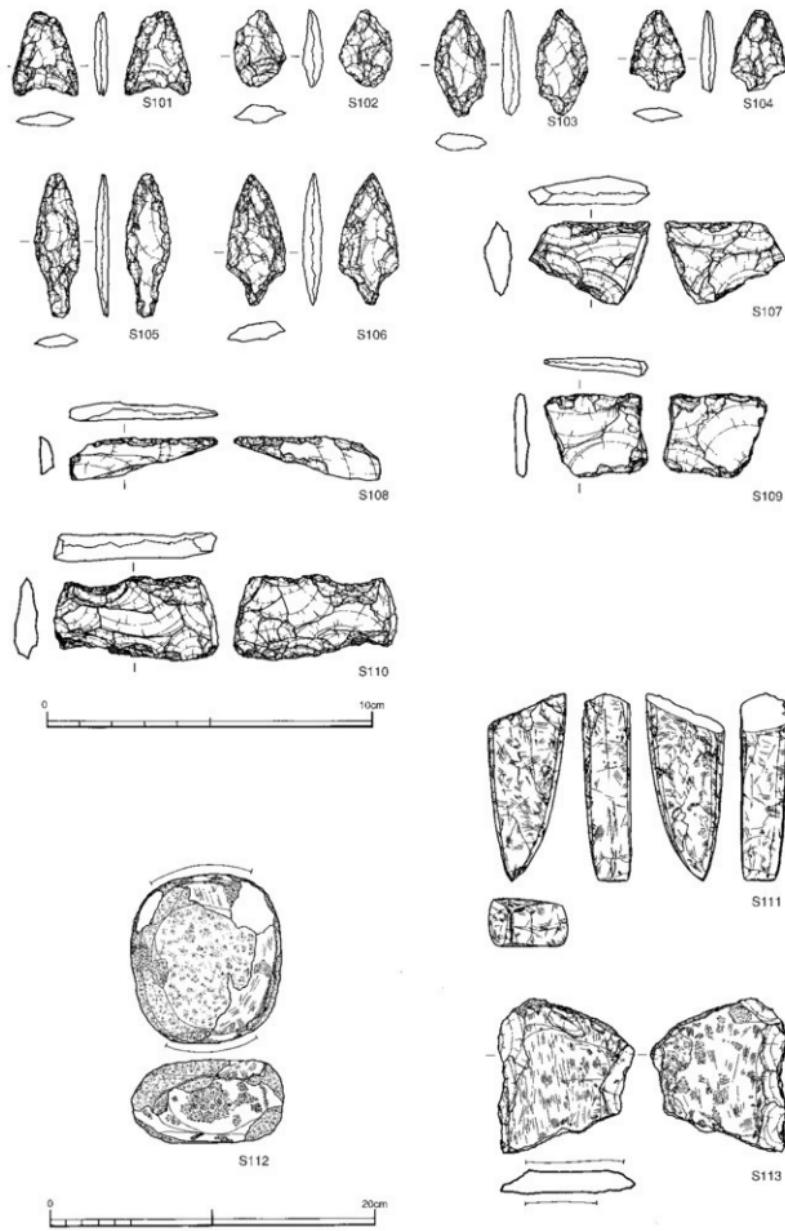


0 20cm

出土遺物 (1)



出土遺物（2）



出土遺物 (3)

---

# 写真図版

---



↑ ①竹原播磨塚遺跡 ②長尾三ノ谷遺跡 遠景（東から）



①竹原播磨塚遺跡 ②長尾三ノ谷遺跡

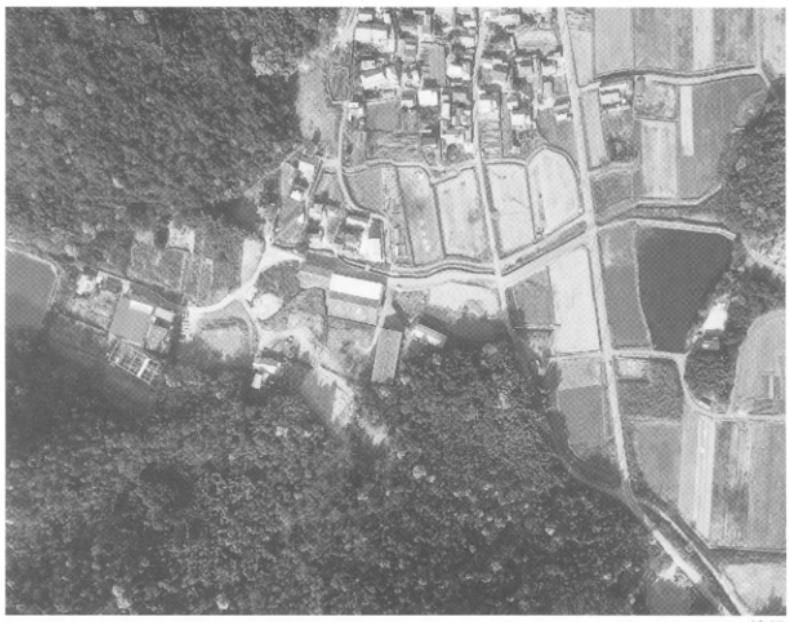
↑ ① ② 遠景（北から）



遠景（東から）



遠景（東から）



遠景



遠景（南西から）



全景（南から）



全景（東から）



全景（南から）



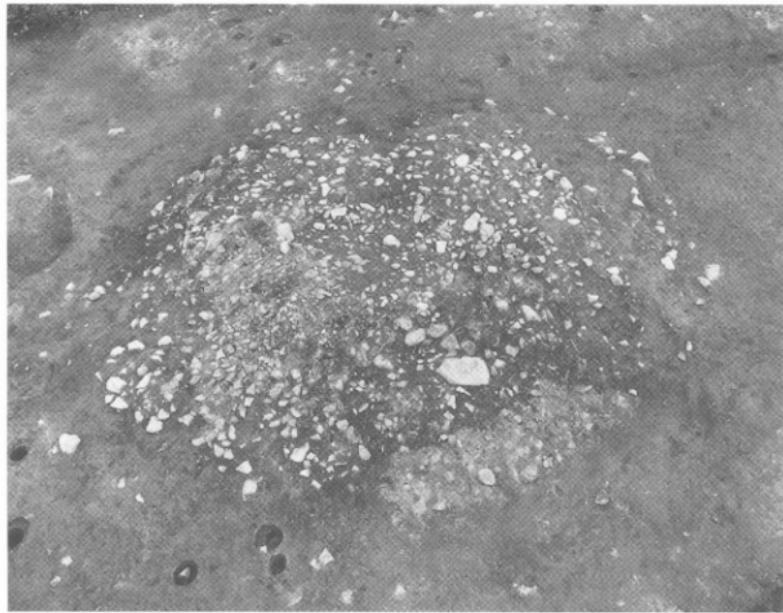
全景（東から）



全景（南から）



SX1 (北から)



SX1 (東から)



SX1 (北から)



SX1 (南から)



SX1 (南から)



SX1 断割状況  
(南から)



SX1 断割状況  
(東から)



SX1 断割状況  
(東から)



SX2 (西から)



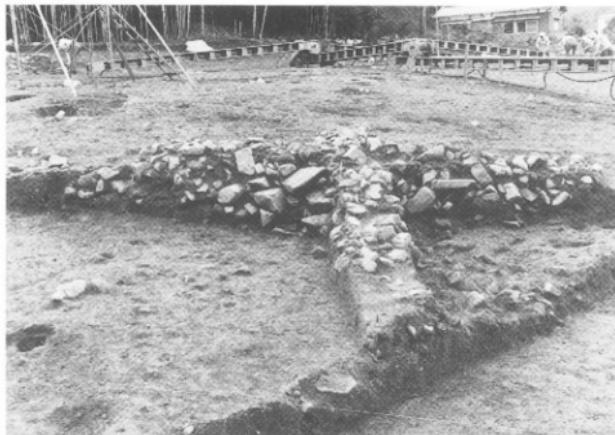
SX2 (南から)



SX2 断割状況  
(南から)



SX2 土器出土状況



SX2 断割状況  
(南から)



SX2 断割状況  
(西から)



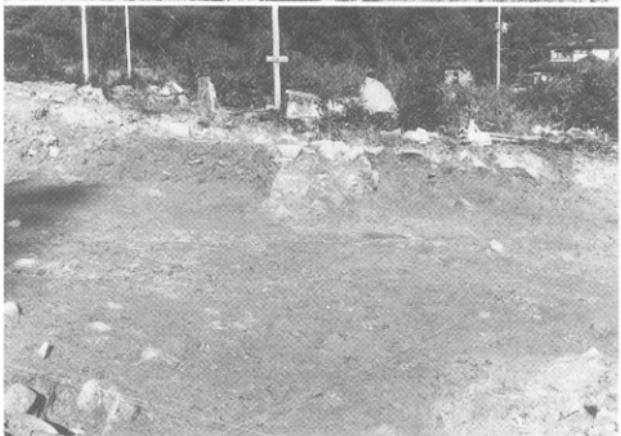
SX2南の平坦面  
(東から)



SX3 (南から)



SX3 断割状況  
(東から)



SX3 断割状況  
(南から)



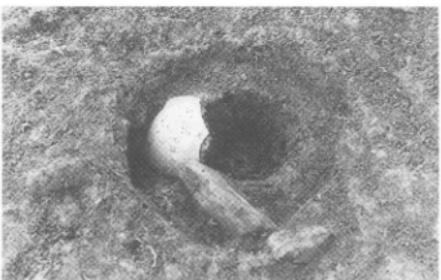
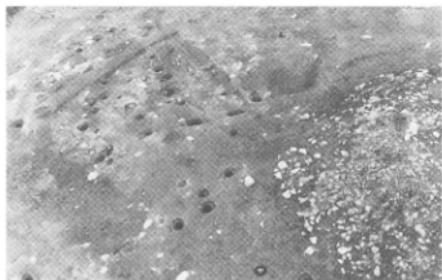
下層全景(東から)

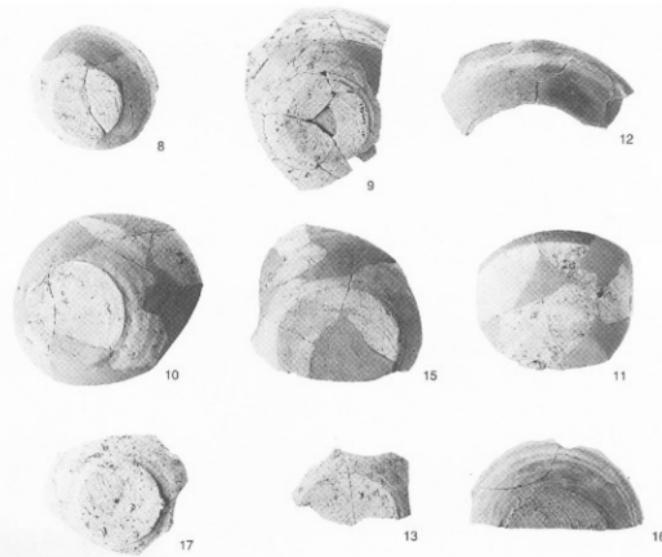
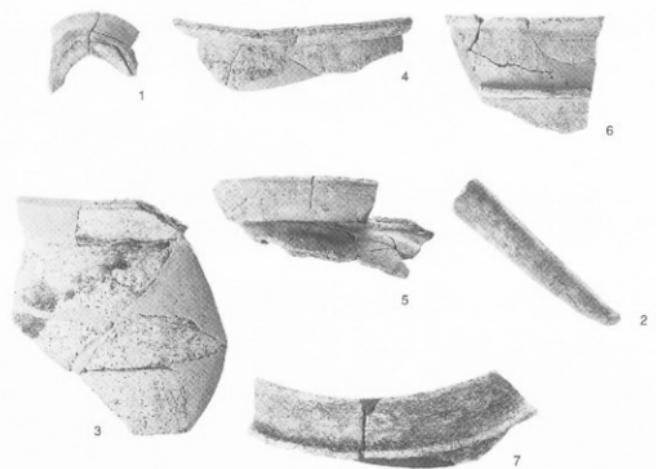


SB1・2(南から)



SB1・2(東から)







20



21



19



18



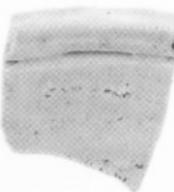
22



24



25



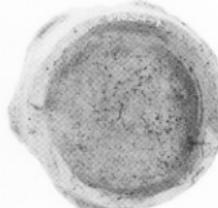
26



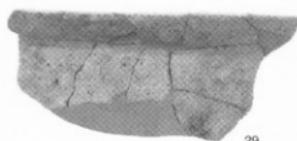
23



25



27



29



30



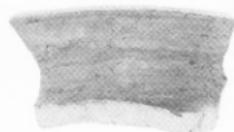
31



33



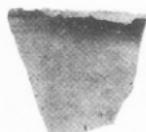
34



35



37



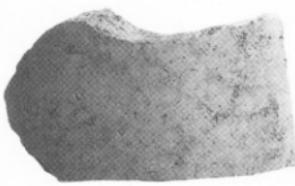
32



38



39



40



41



42



71



44



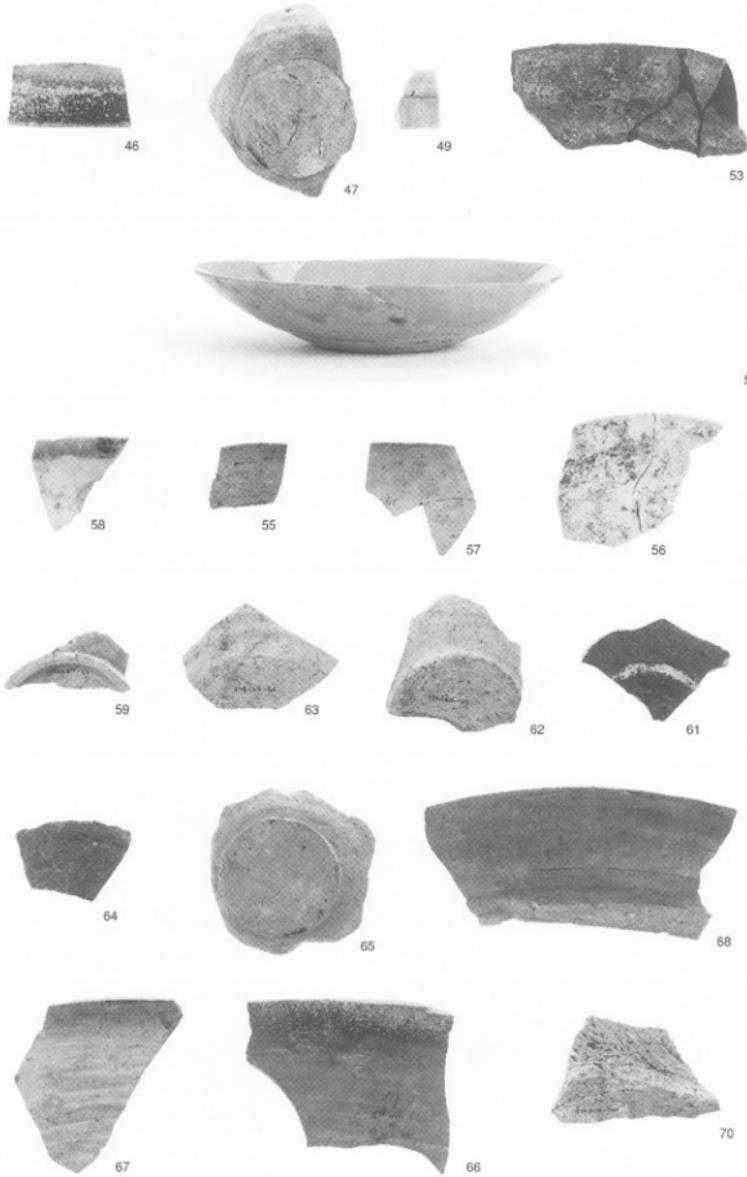
45



72



43





S1



S2



M1



M2



M3



M4



M5



M7



M8



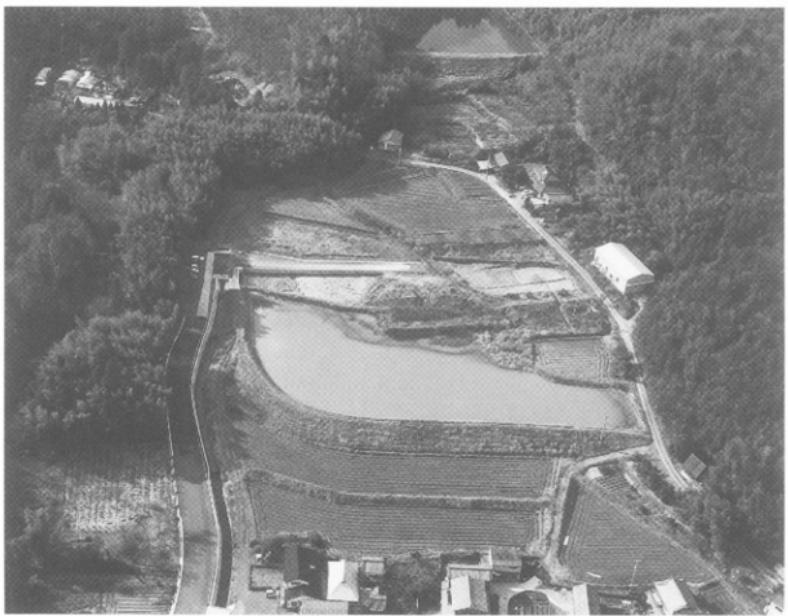
M9



M6



遠景（東から）



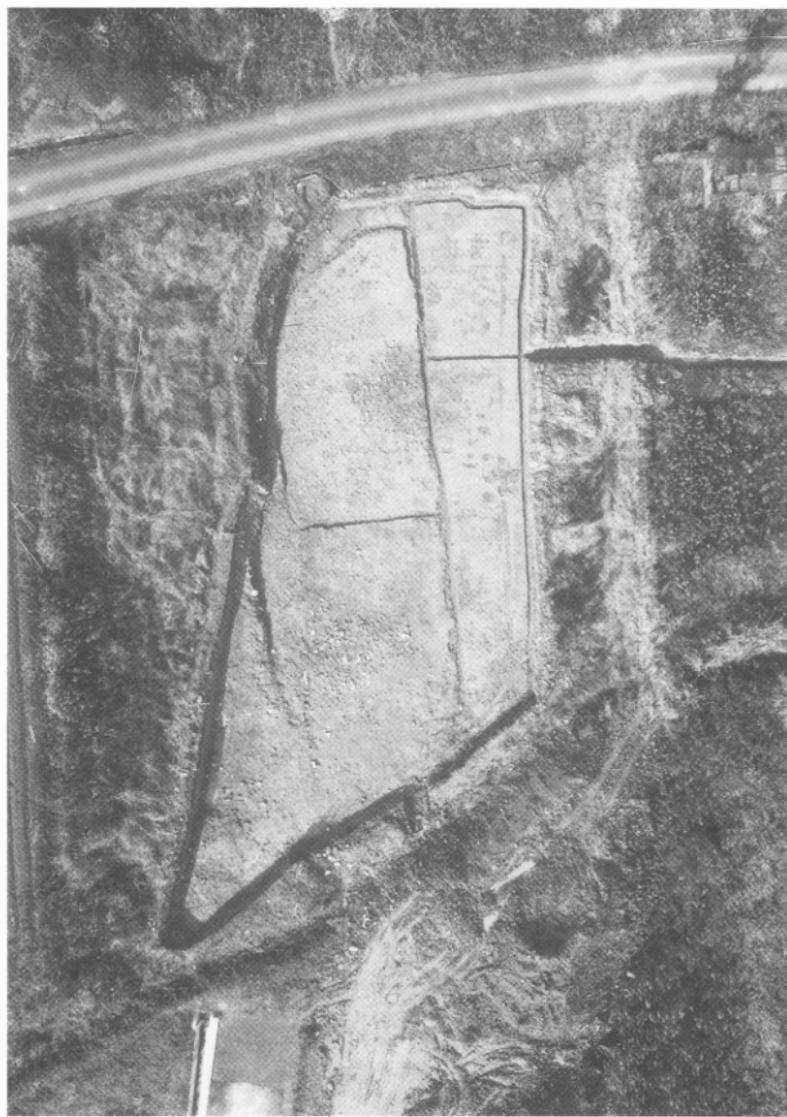
遠景（東から）

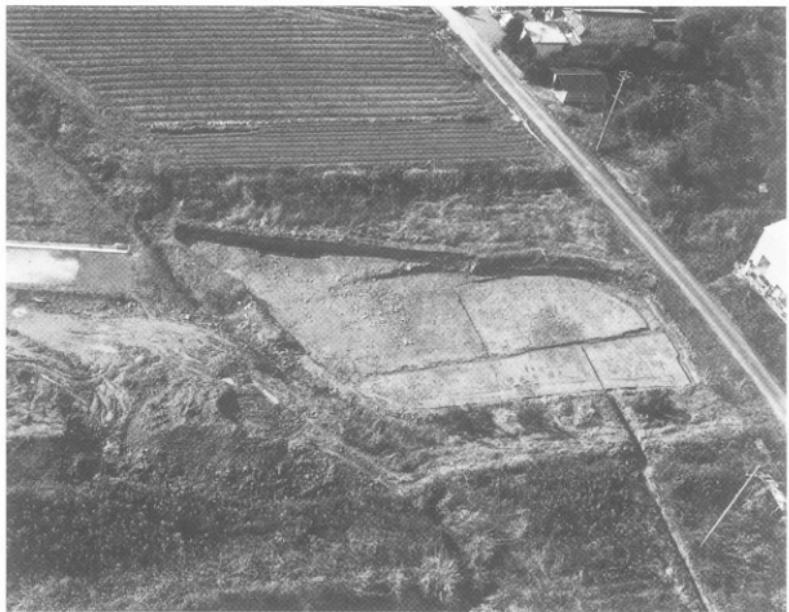


遠景（南から）



遠景（北から）





北地区全景（東から）



北地区全景（南から）





南地区全景（東から）



南地区北半（東から）



南地区全景（西から）



南地区北半（西から）



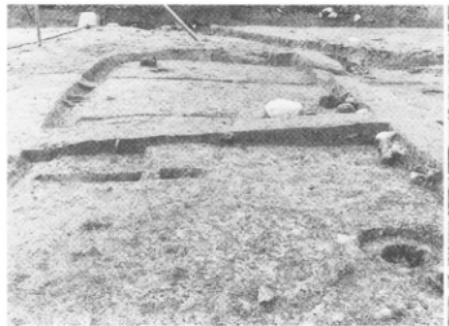
SHI (北から)



SHI (南から)



SHI (西から)



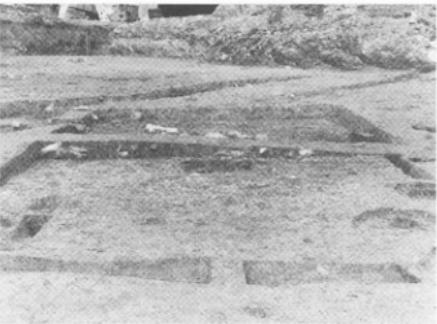
SH1 土層断面（西から）



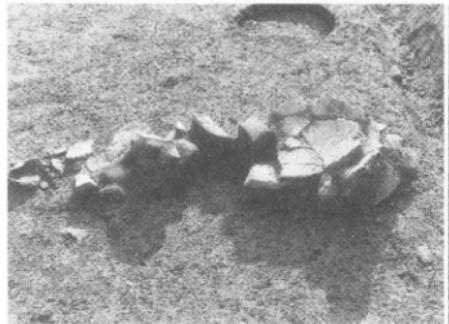
SH1 土層断面（西から）



SH1 土層断面（南から）



SH1 土層断面（南から）



SH1 土器出土状況



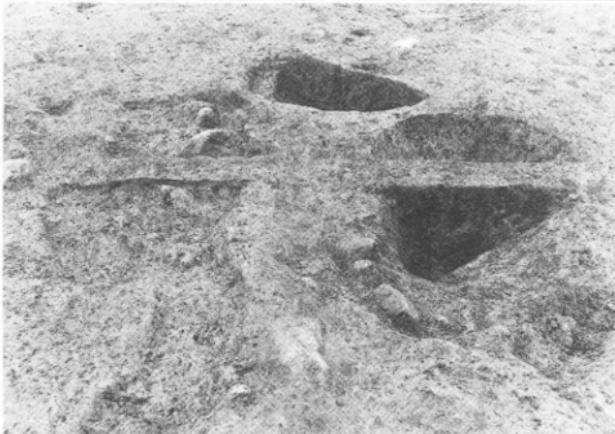
SH1 土器出土状況



SH1・2 (南から)



SH2 (南から)



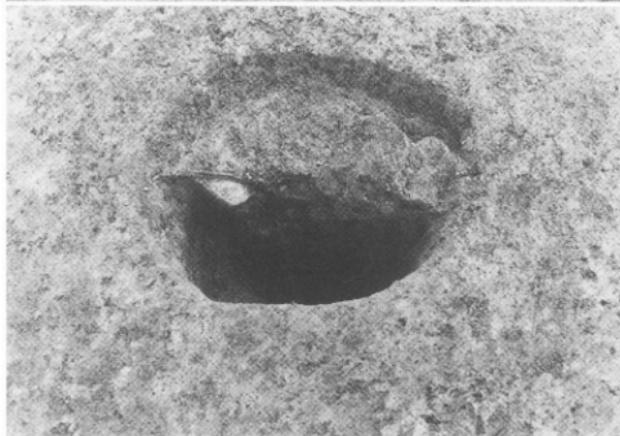
SH2 中央土坑  
(北から)



SB1 (南から)



SB1 (東から)



SB1 北端柱穴  
(東から)



盛土護岸  
(西から)



盛土護岸  
(東から)



盛土護岸  
(北から)



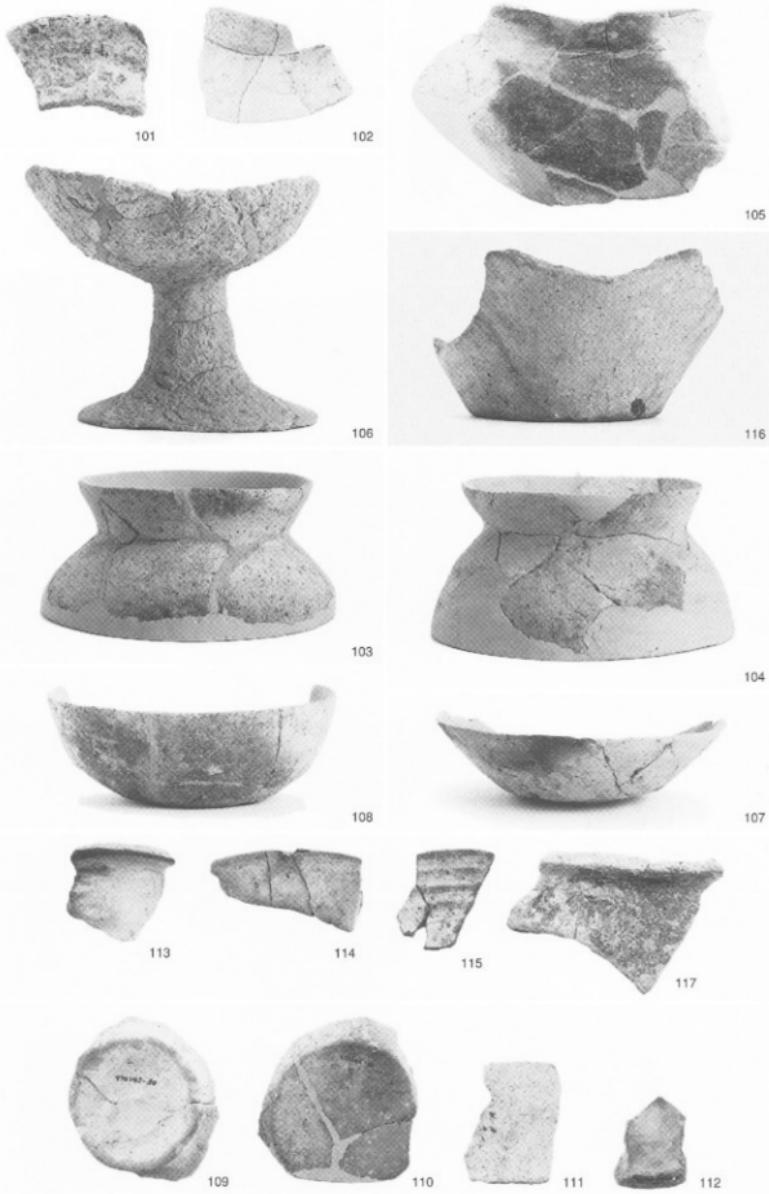
【左】  
盛土護岸（東から）  
盛土除去（南から）  
盛土除去（北から）  
SD1 土層断面（東から）

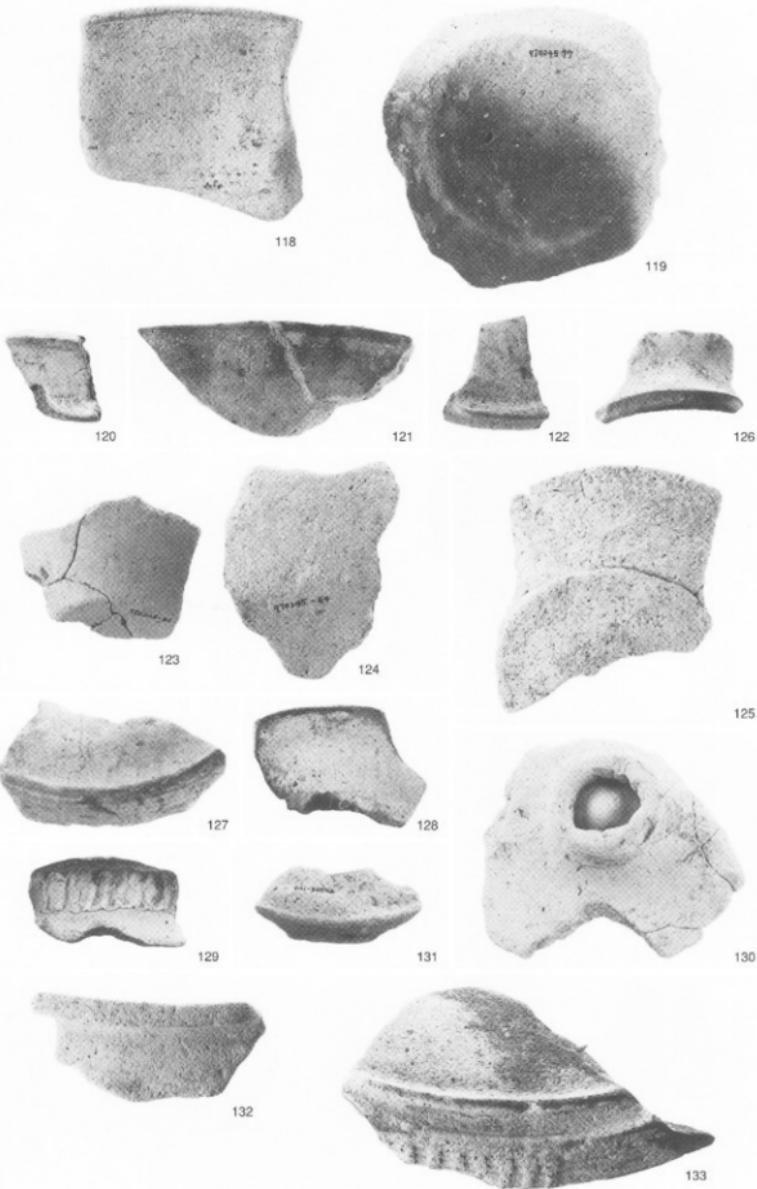


【右】  
調査地区から東を望む  
調査状況



写真図版 35  
長尾三ノ谷遺跡  
遺物  
土器 1



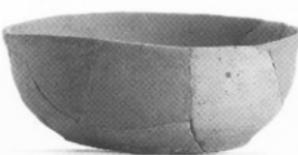




134



136



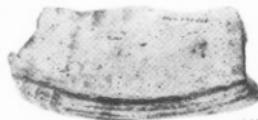
138



135



139



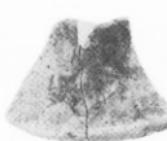
140



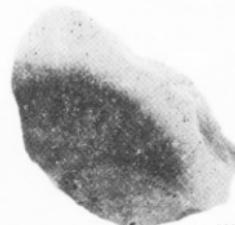
141



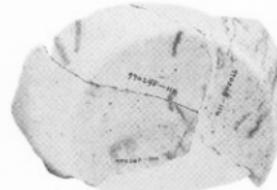
143



142



144



145



146



147



148



149



150



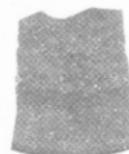
152



154



156



155



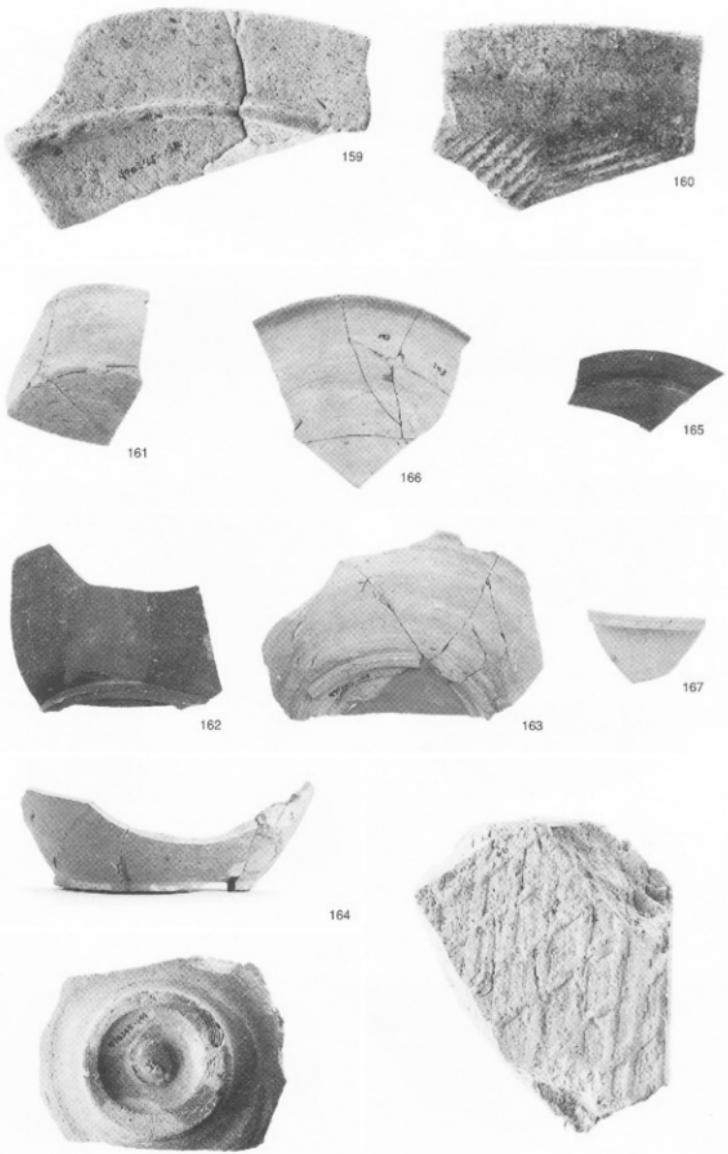
153

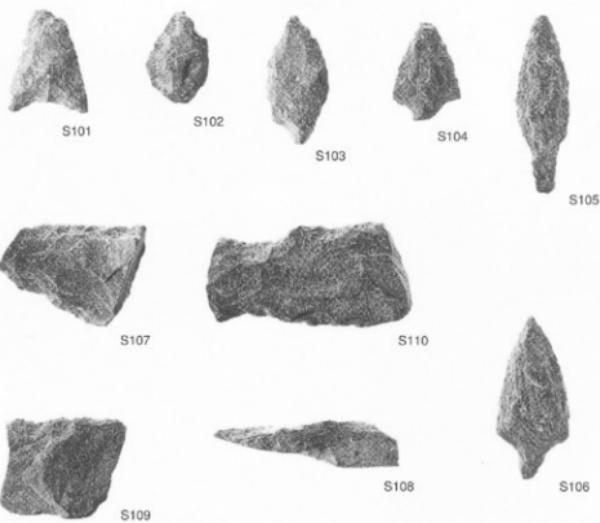


157



158







S112



S113



S128



S129

兵庫県文化財調査報告 第298冊

竹原播磨塚遺跡・長尾三ノ谷遺跡

山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告 3

2006(平成18)年3月20日

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号  
TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会  
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 株式会社七旺社  
〒653-0013 神戸市長田区一番町2丁目1番地



17教①1-039A4